

野津原方言集

15

「七瀬川尾原橋より」

平成五年

横五一 縦四一 種

七瀬川

尾原橋より

五七五



野津原方言集 No 15号 《通算25号》

表紙画……………酒井治郎
題字……………姫野順子
カット……………カット集団

★ ご協力いただいた皆様 ★

故人☞内藤忠人、那須量、熊谷義人、佐藤吉晴、
内藤豊美、杉田信男、橋本杉平、河野英子。
一般☞岡本政雄、寺司勝次郎、安藤キクエ、足立勇、
甲斐隆司、野津原地区公民館、野津原商工会、
アオフィス、システム、サービス。

★ 使わせていただいた資料 ★

野津原文化財こぼれ話、野津原歴史記録会資料。
野津原読み語り資料、肥後街道物語資料、月のうち、
若草子ども会記録資料、野津原商工会肥後街道資料、

調査収拾…小野寿祐、佐藤源治、那須政子、赤星ヨシミ。
調査協力…甲斐英行。監修…小野祐、赤星ヨシミ。
カット……那須政子。構成プリンター…佐藤源治。
印刷製本…小野寿祐、那須政子、赤星ヨシミ。

平成25年6月吉日

野津原方言調査会 大分市大字竹矢

☎ 097⇒588⇒0572

事務局 野津原本町

☎ 097⇒588⇒0092

目次 0

見だし……………	1	方言説明……………	3 1
目次……………	2		
はじめに……………	3	★ 五助街道物語	
表紙画作者紹介……………	4	名残り惜しい肥後街道…	3 7
		子どもん風物詩……………	3 8
★ 民話、伝承		生活文化は人が伝える…	3 9
地から生まれた宇曾山……………	6	夕立に合ったママゴト…	4 0
鶴見山に貰われた……………	7	他領地方言……………	4 1
天狗の住み着いて……………	8	湛水かる今市……………	4 2
法師と輩……………	9	こぼればなし……………	4 3
黒山に咲く花……………	1 0	小無田でお別れ……………	4 4
権現からの宇曾山……………	1 1	方言単語……………	4 5
		★ 五助街道思いで日記	
★ ふるさとん味		巡り合わせ人生双六……………	5 2
味噌豆は子に食わせ……………	1 3	五助なりゃこす……………	5 6
塩つけ食べ味……………	1 4	方言単語……………	6 0
アゼ豆……………	1 5		
柳行李弁当……………	1 6	★ 女性の底力	
竹の皮弁当……………	1 7	子ども会の歌づくり……………	6 7
カタクリぜんざい……………	1 8	あん娘達者か……………	6 9
キナ粉涼しや……………	1 9	夫を戦地に送り出して…	7 1
ヤセウマの情愛……………	2 0	母の情けの弁当の味……………	7 3
★ 方言子どもの世界		★ 玉手箱	
あんた元気じゃった……………	2 2	大和尊命のみやげ	7 6
お礼のナンテンの種……………	2 4	義経を迎える記	7 7
方言説明……………	2 7	浅内長者おったそうな	7 8
宇曾山の道しるべ……………	2 8		
貰い湯の嬉しさ……………	3 0		

能登神楽……………	79	※	方言のひろがり……………	94
バクチ穴の人情……………	80			
頼母子講……………	81	★	あとがき……………	99
方言説明……………	83	★	伝言板……………	100

★ 民話伝承

八斗石、秋葉の力持ち……………	86
一華和尚……………	87
99谷作った鬼……………	88
戦国武将の供養塚……………	90
方言説明……………	92



はじめに

発足当時から10年の予定が15年になり20年を越えました。多くの皆様がたの支えとご愛読の賜物と感謝申しています。先人が生活用語として使った方言は心の中に使いながら継承して今も生きています。平成4年に少しでも記録にと心有る会員が余暇を利用して始めこの間たくさんのお知恵資料を頂きながらその後も調査收拾して足し合わせた宝物を編集しながら使い通算26冊の記録が残せました。

単語も分類しながら分割して掲載終了すれば35000語にもなるのではと思います。勿論素人集団ですので方言でないものや重複するもの差別用語卑下する言葉なども入っていますが方言集の性格上お許しください。大分県立大分図書館にも発行の都度謹呈申していますが永久保存して頂けるとの由。取り組んだ証として残ります。

肥後街道が見直されて以来『街道物語』『故郷ん味』なんかも仲間入り。今回からは『宇曾山物語』も加わりました。こんごともにご愛読ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

編集スタッフ一同

表紙画作者紹介



子孫猴懸
鳥前山白也初稿同
一可同也守百
三ノ首身主人

作者略歴

身上

愛媛県西豫市宇和町

大分市羽屋九組

酒井治郎

夢豈、坤、九台山人

大正八年三月二十日

大分県水墨画協会、風韻漢詩会

画歴

昭和五四年六月 大分水墨画同好会入会 佐藤芝郊先生に師事

昭和六十年四月 大分合同新聞社水墨画教室にて 詫間夢鳳先生に師事

平成一年八月 夢鳳碩水会に参加 引き続き詫間夢鳳先生に師事

平成四年三月 画廊セゾンにおいて 第一回個展

八月 大分県立芸術会館において 豊の国百景展 同時に画集出版

九月 八幡浜市立図書館において 詩と豊の国百景による兄弟妹合同展

平成五年八月 上海・横浜友好展 上海書法家協会優秀賞受賞

平成六年八月 風韻漢詩会参加 古賀了介先生に師事

平成八年八月

平成九年七月

七月

八月

平成十年五月

八月

平成十一年七月

七月

平成十二年四月

七月

十一月

平成十三年七月

七月

八月

平成十四年七月

平成十五年七月

平成十六年七月

平成十八年四月

第一回全九州水墨画展 瀬木賞受賞

漢詩集節齋五弟詩鈔 共同出版

第二回全九州水墨画展 大分合同新聞社賞受賞

大分県水墨画協会設立に参加 副会長就任

第十回全国水墨画秀作展 特選受賞

産経新聞アト展 特選受賞

第三回全九州水墨画展 瀬木賞受賞

第十三回国民文化祭 実行委員会会長賞受賞

第四回全九州水墨画展 郵政大臣賞受賞

第一回日中交流水墨画展 審査員奨励賞受賞

第五回全九州水墨画展 北九州市議会議長賞受賞

第十五回国民文化祭 毛筆事業協同組合理事長賞受賞

第六回全九州水墨画展 総務大臣賞受賞

第七回全九州水墨画展 福岡県議会議長賞受賞

全国水墨画研究会設立記念展 中国大使館賞受賞

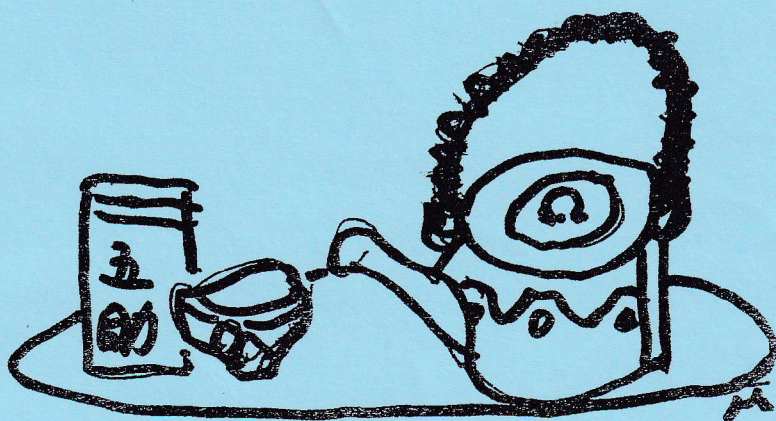
第八回全九州水墨画展 日本・中国文化交流協会賞受賞

第九回全九州水墨画展 北九州市教育委員会賞受賞

第十九回国民文化祭 実行委員会会長賞受賞

大分県立芸術会館において 米寿展 同時に画集出版

民話 傳承



地から生まれた宇曾山

そん昔ん昔ん地震の後じ 山揺れがあつたかち思うたら ダマシ地面がせりあがっち ありゃありゃち見るまに 丘がでけた。周りんしたちゃ そん不思議なこち一 タマガッタが それからは毎日んごつ背のびしち 1月あまりんなかめ 姿んいい山が出来あがった。『ウドウムドウ』したき 宇曾山になつたとか。

そん先っ端は塚野ん谷かる 横に広がり吉熊ん谷まじ続いち そっこ台地も出来た。そん層にゃ砂礫岩が見らるるき こん間ん地層は特別ん ご褒美とん言われよつた。そん話しも頷くる。盛り上がった山んしたん土にゃ ヒョイトスリャ穴でん 開いち ょりゃしめ一かち 心配するしもあるが 心配いらんわな。そこにへータ水は温められち 別府に出よるんとんこと。

なしここだけこげ一盛り上がっち それも一つん地層があるた やっぱ 不思議な気がせんでんねえが ほんななし別府に水が出たな なしかえ。五助さんが問い詰められたもんじゃき こげな話しゅう続けた。

『鶴見山に貰われた宇曾山』

由布山かる 『鶴見山が宇曾山め嫁にほしい』ち 申し出があつたんと。障子岳なんかが集まっち 相談の上じコンコツ本人に話した。宇曾山な いい返事じゅせんもんじゃき 無理う言うてん後じムゲネーコチなつてん 悪い。由布山にこんこつ返事したんと。

そん話しゅう影じ聞いちよつた 鶴見山な急に泣きで一ちしもつた。涙は地に入つたかち思うたら 熱い湯になつち地上に噴きで一た。由布山も世話がでけんじゃつたき 悔しさに泣いちしまい そきい熱い湯が噴きで一たそうな。なんとん早もうなえ。

巡り合わせとか『縁がなかった』は 世の中ん流れじゃき仕方なかった。宇曾山も『申しわけない』ち 反省しちよるじゃろうが これが縁でんあるんじゃろう。別府でん由布でも熱い湯が出る そこじサラリト流したなゝ やっぱ男らしい。今でん塚野かる吉熊ん間にゃ 熱い湯は出らんけんど冷たい《鉱泉》なゝ 出るぬ見ると 神様も情愛ん裁きうしたんじゃろう。

そん宇曾山にゃ昔かる こげな話もあつたんと。それもほん こん前まじゃ花舞台でんあった。

『天狗の住み着いた宇曾山』

夜なべんキリがち一ち 月ん美しい外に出た。山ん中腹ん松ん枝かる枝に 白いもんがヒラリ飛ぶ。『何じゃろうか』 じっと見据えちよると 又こっちん木かるもヒラリ。目が冴えちしばらく見とれちよつたが ヤンガチそん姿も消えた。次ん日こん話しゅう村ん 年寄りに話したら 『あれは天狗さんじゃ お前見たんなら力がついたかん』

タマガッタ男は 腕をナデクリマエーチ 側にあった藁打ち石を抱えちみると なんと軽く持ち上げちしもうた。『やっぱ 天狗さんのお影じゃ』ち 喜くうだ。病人の声を聞くとスート現れち 病気を治しちくれたちも言う。そん時ゝ普段の人間と変わらんち言う。

そりゃゝ化身したんじゃろうよ。人ん病気を治すためん修行を 人ん寝静まった夜に シヨルンジャロウ。力を貰った男もそん力を 人ん為い役立てち過ごしたき 幸せにイノチキシタチ言う。不思議な山ん宇曾山にゃ こげな話伝承があるもんじゃき 五助さんも勉強シヨルンデ。

『法師と輩の真剣勝負』

法師の姿を見ち忍び足じ 後をつけち行く影2つ。盜賊か月
ん明かりにそん影がチラホラ。法師は立ち止まった 『私に用
なのか』……返事もねえじ双方かる 襲いかかち来る。こん
たたずまいにゃ人う困らす 盜み輩を人は盜賊ち呼び 大変迷
惑しちよつた。どき一行ってん嫌われ 行き場も暮らしも不安
定じ 山ん中にオオカタワ籠もちよつた。

散々な目におうた輩2人じゃ 反省したんか自戒したんか
法師ん論しをゆう聞いち 自分たちん行状ん無知さも 想い知
り『人に二度と迷惑かけん』 そん証拠に周りん崖を切り落と
し 素晴らしい高台を造ち そこに法師を住んじもらい 崖
下周りもこん一族じ守ち 地区ん人たちとん力合わせち 里
づくりを勵んだち言う。

遊牧ん人たちん行きづまりか そん厳しい暮らしん果てじゃ
ったんか 法師ん教えに目覚めたなま 立派な事であらう。
素直に聞き入れち正直に戻った そん気持ちゃやっぱよかった
ち思う。法師が誰じゃつたんか ヒョイトスリャ神か仏ん化身
かん 知れんが宇曾ん風にゃ 人ん道う教えたいいもんが 入
ちよつたんかんなえ。

宇曾に出ようか 荒木に行こうか 四辻峠の 思案顔
七瀬の せせらぎ サラ サラ サラ サラ
ホイ ホイ ホイ

そん風に乗ち来るごつ 聞こえち来る 馬子歌にゃ 里ん
人たちん情愛が 仄かに こめられちよる。のぞかな 故郷も
みんなの苦勞に 想いやりによち 出来ちよるんでんある。

『宇曾山は武芸修試験場』

武芸百般の修験な宇曾山がゆう使われた。1400年代里の熊谷指南な 剣だけじのうじ棒、槍なんか多方面にわたっち 門弟にも技うつけよった。昼ん忙しい小者たちゃ 夕方ん時間ぬ利用するき 走っち駆けつけたもんじゃ。そん門下生にゃ郷土んほか 木の上、大分、谷、別府なんかん 住人の名前も連なっちよつた。

それに伝えられたこた一切 漏らさん事ん念書もあっち 明治かる大正まじ続き 昭和はじめん出征兵士が護身のためん 指南の免許をもつちよるしかる 指導も受けよった。宇曾山な神の山でんあり武芸ん場でんあったわけ。普門寺時代に天神免の『女人禁制』を したこともゆう解るごたる気がする。

『黒山の里に咲く花一輪』



谷を流るる水ん音に耳を傾むくと 今日も素晴らしい一日ん 訪れを告げちよるごたる。ふり仰いだ山の頂きん 松ん青さが今昇った陽の光りに くっきり映えち時折り揺るる風ん音と 一緒に山谷う越えち物静かに こきー来るごたる。姉弟がつーじ行く先ゃ決まっち 陽だまりん松ん根元。こかゝ風うよけ雨う凌ぎ寒さかるも 守っちくるる場所でんあるぬ 子どもどまゆう知っちよる。

親ん昼間ん食い物搜した 違う 子どもん場所は別天地。水う飲み木の実を取り 山にあるもん全てが遊び相手 いいトギでんある。黒山に人が住んじ暮らしに 火を使いよったち言うこたー 九州ん南と北ん接点でんあったきか。そげな恵まれた場所じゃき サカシュウしちおられたんじゃろう。面倒見るしがありゃ 助くるしもある。

常にそんな気持ちを持ち続け 故郷ん土に根を張り幸せづ
くりにかゝり合わせちよつたごたる。そしち東にふり仰ぐ宇
曾山は心んより所 神の里としち自分を大事にするごつ した
に違いねえ。山や野じ川に取れたもんな ます供え感謝し
ち共にそり分ちあう。それが生きち行く為んどんくれ
大事じゃつたんか。そり教え守り受け継いだ 人たちん足
跡ち辿ち行くと 素晴らしい山と野と人とん 関わりあい
が浮かび上がちくる。

日暮れが近くなち西に傾くと 野じ摘み取った一輪の花
ち大切に持つち子供たちも 自分がんかて急ぐそんな草道ん
傍らに すだく虫ん声は優し語りかけちくるるごたる。1
日が終わり西日にぬかずいち 無事を感謝した人たちが 後
ろに聳ゆる宇曾山な心んよりどころ。西に沈んだ太陽と入れ
代わりに 昇った月ん光に浮き彫りされた 老松ん梢からは
ひとときわ鮮やかな山ん姿。あん山にあん木木に そしちあん
岩に皆んなが心ん安らぎち 求めちコイサも手を合わせち祈
る。

獵場じ捕った物 集めた物なんかヤンガチ 夕餉ん膳に
飾る時 月に美しく描き出された 里ん静まりん中にアド
ケノウ咲いた 一輪の花をシャント胸に抱いち まどろみん
里に行く少女ん頬に 黒山ん夜は更けち行く。そしちせせら
ぎん音を鈴んごつ響かせち 流るる谷水に浮かべた笹舟。そ
りゃあん少女ん心を伝えち行くごたる。

あん娘《コ》年頃 姉さんかぶり いつか覚えた 馬子歌
を ハ 七瀬のせせらぎ サラ サラ サラ サラ ホイ
ホイ ホイ。喉に自慢の馬子の唄は 山谷越えて 遠くまで
届き かえってくる。のどかな 古里ん夜が更けち。

『権現から見える宇曾山』

櫓戸ん鳥居ごしに眺めた宇曾山に 乳を流したごたる霧がかかり 時折うっすらと姿を見せた そりゃ尚更美しい。白山権現をはじめもつん寺ん 朝を知らず読経が聞こゆる頃にゃ 慌ただしゅ人ん行き来も見らるる。鶏ん鳴き声が谷川ん水ん音と グワユウ調和しちアサゲン 立ち上る煙りも深い霧ん中に 交差しながら消えち行く。

仏や菩薩が人間を救う為に 他んもんに姿ゅ変えち現れるこつゅ 権化とか権現とか言う。昔かる神仏ん在所としち栄えたこん 地にいつ頃誰がつけたんか 分からんけど丹波生まれん 神職が帰国の間際に足ゅ痛めち そんまま永住しち名づけたとん言う。今でん使われよる妙なる呼び名でんある。

和銅始めん頃そん頃悪病がはやりより 皆んなを真剣悩ませたそうな。土地んしたちは広がりゅ心配しち 『薬師如来12神』を祀っち 目白山天徳寺を建て祈とう所を 設けち祈願したき病氣も少のうなっち それかるち言うもんな 神仏を拜む気持ちになっち言う。人かる人に伝わる人間の心ん より所が固まっち行ったんじゃろう。



道端ん地藏様にも赤いべべ着せち 手を合わする老母が 孫にそん様を見すりゃ いったんなかめ一か孫も 手を合わせよるき。モミジンごたる手を合わせた横顔にゃ そっと目をムイタ地藏様も 嬉しそうに笑顔になっちよる。白山権現のお旅所が古町に出来た頃 平野ん祇園神社んお旅所も一緒にあった。お祭りじゃ物と物ん交換があるき ソリャモウ賑やかじゃつた。人ん心が和めば世の中も又のどかじ 宇曾山も眺めちニコットしよったじゃろう。

新刊

ふるさとん味 『味噌豆は子に食わせよ』

盆前になると味噌ん仕込みん 豆う炊く煙りがアッチコッチ
かる 立ち昇んも田舎ん風物詩。『味噌豆ゃ遠方ん子にも食わ
しい』ち 言わゆるはず年1回 暑い時ん仕事⇒暑い時い子供
にゆっくり 里じヨコワセテエ そしち豆じあるごつ 滅多え
ねえこち一出会いさする そげな親心かん知れん。

暑い盛りに豆をクーチ《柔らかじ消化もいい》 栄養を付け
らるる意味も含まれちよるんと。そん味噌も1年程過ぐりゃ
トテンウメー最高ん味噌 なんちゅうてん『あふくるん味』。
百姓んおなごしん 大けな夏ん仕事でんあるが じゃきこす味
ゆう造る 手の技がいつんなかめ一か 付くき不思議でんある
。

※ 豆じある…サカシュウじ元気で いてほしい願ひ。

『塩うつけち食べた味』

育ち盛りん子供にゃ親が 心配するはずもねえ 夢ん世界が
ある。春先にゃサトガラ、ギシギシ、アオウメ、トーマメ、グ
ミ、野グワ、草イチゴ、アケビ、ガラメ、リンドウん青い粉、
ツツジ、ナス、キュウリ、ユスラ、ビワ、カンネん根、マカヤ
ん根。手当り次第にチギリ 取っち食べたもんじゃつた。

それにゃゆう塩をつけちたふる。そりゃ清むるためか 消毒
殺菌の意味か 子供ん世界にゃ独特ん習ひ 覚えた食文化にゃ
ちっとオオゲサじゃけんど 口んハト一色染めち元気そんもん
。ゆうまゝ病気もせんじ 腹くだしもセンジャツタち 今思ゃ
ヒヤヒヤドキドキん世界じゃつた。オトシ入れた
塩が埃じキサノナッチョツテン ふんとまゝゆう
つけち 知らんふりしち 食う満足顔ニタリン。

※※※ 塩餡餅ん情愛が伝わる ※※※

亥の子ん晩にゃ夕飯もソコソコ 子供たちちもう浮き足たっち ゴソゴソ『亥の子槌』ち プラサゲチ近所ん子を誘う。早え子どもまわもう叩きよる。『今夜ん亥の子……………』 決まりん唄が百姓屋ん多い所じゃ 秋ん風物詩になっちよる。早取りした糯米じツイタな 珍しいだけに 普通は粉米餅も多かった。

餡に新しい小豆ん『つぶし餡』が 入っちょリヤもうすぐ 口い運ぶんも欲んねえ子供ん仕業。ちっと大きゅなりゃ 女ん子どもちヤッパ家に持っち帰る。中にゃ『塩餡』も珍しゅわねえ。砂糖屋が遠いんかとかにかく 砂糖は入れんじ薄塩味ん餡。それでん久しぶりん餅となりゃ たとえ塩餡でんもう 喉ち唄うち通る。

『やんな食わんのか』『うん腹減らんき 持っち帰ろう』 親が聞きゃ涙がこぼるるごたる話。日頃ちシカトシモネェ食いでんあるが それももう慣れちよるき 当たり前ん気持ちじサカシユ生きちよるんが不思議。人間ちユウシタモンじ いもんのジョウ食うてん 病気んじょうシヨルしもある。

塩餡でん『有難い感謝』ん気持ちが ありゃそれが血にも肉にもなっち 元気ん元にもなるんジャロウ。いい食い物ぬ食うしよりも 仕事しち造る人たちんほうが 元気いいち誠ゆうしたもんでんあろう。『塩餡じ悪いなえ』心じ 言い訳する心のなんと清々しいことか。

餅米ん仄かな甘い香りに 薄味ん餡こが包まれた まっ白い『亥の子餅』貰える幸せ あげられる今ん幸せは 生かされちよる人間には 大けな意義があるごたる。

『アゼ豆』

田植えシコーン畦めりが済むと 『アゼ豆』 植えは子どもん仕事。金樋じボンと穴をあけち 大豆やら小豆やらを2、3粒ずつ入れち 馬ん糞やら灰をかぶする。これじワクドかる食わゆる心配がのうなる。検地された田かるそん広さに 応じち税がかけらるるが こん僅か1、2尺ん畦に 実った分にゃそれがなかった。いわゆる余分な収入でんあった。と言うてん高価なもんじゃねえが 食料としちゃ十分に補える 大事なもん。時にゃ大けな役にもたっち 小作農家にゃフトコロう 助けちもくれた。

大豆は豆腐やら味噌豆なんかに 使わゆるき時や買い手がガイトついち思わん高値がチータリ 買い手買い手が競争するナンカドマ もう夜の明けんうちかる 戸を叩きよるきタマガッチ 起きちみるとなんと『大豆買い』 『なんぼでんいいき売っちくれなゝ』 『……』 笑いが止まらん。

小豆は使い前がドンコンネエイイ お歳暮ん贈り物にホシガルそげな 年どまドキーッテンねえ。もんじゃき高え取引になる。『ちっとわけちくんなゝ』 子供連れじくるとヤッパ情が湧いち『まゝムゲネコサレ』 心ん中じ底まじスクイアゲチ 『コレダケシカネエキナ』 『おおきに』 お互いに笑顔がこぼるる 農家ん庭先風景。

出来が悪かったきオシナギーケンド こん際じゃきチットでん売るりゃ セツキが越せるるき じいさん、ばあさんに腰巻ん禪んひとつも 買ちやらにゃなるめえのや。そりゅう見よった子どもたちも じっと見つめちよるぬ見りゃ 『オカンがん帯ゃ又先延ばしなるかのう！ ち横顔見たら『ウツガンナいいいで！ そりゅう聞くとホットするけんど。うちじ食うなゝ残ったんかのう……』

『柳行李弁当』

柳ん細木を利用しち編んだ 『柳行李弁当』に アワ飯が
いっばいつまच्चよる。大けな梅ぼしが2つナロウジ 周り
ゅ赤く染めち白、黄、赤ん調和が ナントン言えん美しい。
開くと思わん生ツバガ 湧いち食欲うそそる。風通りがゆう
じ適当に水分も 取っちくれち ソレカチ言うち乾きもせん
き 夏ん山仕事やら旅に行く時なんか ケックシャ重宝じゃ
った。

『弁当え』ちゆう珍しがるが 作った材料がそこらにある
柳。味噌づきゅう側に入れち 背にカルヤ形もクズレンし
食べたあた一水洗いもワキャネエ。食生活にうまい具合に
溶けこんだ弁当箱でんあった。人間の暮らしに奉仕しちくれ
た こげな素朴な入れ物じゃが 人間の知恵たぁフント ゆ
うしたもんじ 昔んしの考えつく力え感心する。

それに連れなうごつ使うんが 『竹ん皮弁当』があった。
こりゃ入れ物じゃねえけど 一つ一つ包んだ入れ物じ 夏
だけじゃのうじ いつでん軽便に使われよった。三角ムスピ
ん愛らしい姿は素朴な中に上品さも チャント見せぶらかす
。

『竹ん皮弁当』

開いた時ん仄かな香りは 生活ん中から湧き出したごたる
上品。そり一殺菌力もあっち 夏でん安心が出来たもんじゃ
った。手軽に持ち運びが出来ち 形も崩れんき気にいられ
梅雨前に取ったな乾かしちよきゃ 長う保存も効き使い勝
手もいい。漬け物やらん色が横につく 香り匂いが味を加え
ちもくれた。遠方に行くときにゃ決まच्च 米の飯じゃつた
き 減多に米飯食わん子どもたちゃ 嬉しかったもんじゃ。

米飯ち言うな盆か祭り そりー正月んほかは葬式じゃつた。
葬式ゃ待つわけじゃねえが 祭り正月は決まっちゃつたき こ
んだ米飯しゃいつどち 子ども心に待ちよったもんじゃ。そげ
な時んあいだに葬式がある 大ケナ釜じシコタマ炊く。どして
ん『コガレ』が出来る。年寄りが氣を利かせち 終いに一炊き
火を入ると 旨味満点のコガレ。

お客さんの接待に取り上げた 残りにパラパラ塩をふると
『コガレいる子はんか!』 コンメー声でんすぐ聞きつくる。
包丁じコネアゲタ狐色んオコゲ。美味しい味はその家ん 不幸
はさておいち『うめーなえ!』 顔見合わせた子どもは純真な。
ひとしきり食うとイツンナカメーカ 蜘蛛ん子を散らしたごつ
どっか行っちしもうた。

竹ん皮に包んだニギリ飯 そりゅう風呂敷に包むと 遠足で
んあるんか横かるいしち出た。『今日はどき行ったんな』『里
んしがちっと病りいき!』ち 便があつたき行くと。そりゃ言い
訳じ顔見てんじゃろう。『どっちしてん食い物んまじ当てに
そりゃ悪いき弁当持たせたに!』『まゝまゝ お固い事じなゝ!』
嬉しそうに竹の皮弁当は 懐かしいんかん知れんき ひりい
好きち言いよつた 味噌漬うガイト入れち。

人ん情けが行き来する そげな生き方ん中でん食い物は 何
か格別でんある。人にもらう頂く その心ん中にある情愛こそ
故郷ん何ものにも変えがたい 味かん知れん。手作りじゃき
こす隠れた旨味があり 『あの人に!』と思う味が 隠されちよ
る事もあるもん。

柳行李弁当といい 竹の皮に包まれた握り飯
と言い それには見た姿以外に人ん 心ん
旨さ 美味しさも隠されて 仄かな情愛を
醸し出しちよるごたる 不思議でんある。



『カタクリぜんざい』

貧しくとん来客には せめてん最大んオモテナシュ しちあげてえものじゃち思う。そん気持ちはヤツパ通じるもんでんある。素朴な人情は強う相手ん 心にも響くんじゃろう。寒い日にわざわざ来ちくれたが あいにく口に珍しいもんな なに一つねえ。わずかに残ちよつた アズキに竹ん皮お入れち煮ると、時ん間に煮ゆる。

話ゆしよる中め煮えた ほんチットン小豆う使うち カタクリユ水じ溶くとそりい 入るると増えち そん中え正月餅うオキ火じ焼いち入るる。カタクリぜんざいん出来あがり。ちっと入れた黒砂糖ん香りがなんか ブゲンシャんごたる香りになり 風味んいい『ぜんざい』が 見事一丁あがりになった。

ゆるりつと出来上がった中に 舌を焼くごたる餅が隠れちよる。粉雪ん舞う外ん寒さん中に ほのぼのした心尽くしん 食べ物なもうブゲンシャでん ビンボウでんねえ 人ん気持ちがいっぱいに満ちちよる。接待は心んもてなしじあり 物や金以上ん宝物かん知れん。

『うめーな ぁ こりゃー何ち言うんな』『おかしげねーなえ こりゃーカタクリゼンザイち 言うんで。勝手に俄かに付けた名前じゃけんど 言わるりゃソゲーもなる。何より大事な心んこもった お接待じゃき尚更価値がありそうな 食べ物にほっと嬉しゅなった 気持ちがいつまでん満ちちよつた。

咄嗟に考えたんか それとん常日頃かるん訓練か 手際んいい接待振りに 空間が埋めらるると心が いっそう豊かにもなるき不思議でんある。人はいつでんこげーありてえち 思うなワキャネエガ ソン癖やるとなりゃ こりゃ至難の技じゃろう。

『キナ粉は涼しさ』

久しぶりん里に帰った昼さがり 玉んゴタル汗っ拭うちよると 母は決まっち作っちくるる 『ヤセウマ』キナ粉ん香りとそん 菌ざわりが旅愁をそそちくるる。そこにゃ思いやりん気持ちちが 込められちよるんが嬉しい。夏になりゃ粉を使った料理が多いのん 米を食い延ばすささやかん 知恵でんある。

それだけじゃねえ生活ん知恵 長年伝わった染みちいた苦勞かる 抜け出す逞しい反抗かん知れん。こん『キナ粉』にゃ体を涼しゅうする《冷やす》役目も 持っちよるとか。まさにグアユシタモンの 生活技法でんあるごたる。こんヤセウマにしてん ダンゴにしてん 盆にゃ付き物でんあっち 一年じ一番暑い時期ん 食べ物としちゃ 当を得ちよるんじやろう。



そりゃ健康ん為でんあり 生活ん方便でんある。暑氣払いち利用した人たちん 考えだしたんかん解らんケンド 無駄でんねえ教訓でんありそう。口んまわりチータ きな粉をソット拭いち 親子が顔見合わせち 思わん笑ったのん 心から嬉しい一時じゃかるか。

『ヤセウマ』んこつー『ヒキマメシ』とん言う。引っ張っちキナ粉にマメス 自然の仕事っそんまま表現した それが名前になったらしい。聞いただけでんあん キナ粉ん香りが鼻にふっと入ると むらむらっと食欲が湧く。もともとは『ダンゴ』にしち 茹であぐる途中じ手法が違い 延ばしたもんじゃき『ウドン』になったり 『引き延ばし』になったりする。

そんうちーキナ粉っ付けち食うと ケックシャウメーとなる食文化たーこげた形じひろがったごたる。

夏ん暑い盛りイリコイッペー荷物 鞍に乗せられた馬が汗っ流しち 舌をペロリ出しちよる。激しい動きじチット瘦せた馬 そんな馬がだす舌も まさに瘦せ馬ん舌に似た。茶店じ話しよった物知りが トワズじ話したがそのまま街道じひろがっち 『これがヤセウマな』……とまゝこげな次第となり候。そげ言ゃ似ちよるなえ。

『落人たちん話ん中』にゃ ヤセウマにちーちこげな話があった。お盆ちゅうなゝインド語じ『ウランバナ』ち言う意味らしい。盂蘭盆ち言う刑罰ん中じ 一番ヒジイソウナ。サカサツリン極刑とん言われ 人間の一番苦しい姿勢。これがお盆じある訳。

自分が積んだ罪によっち さかさ吊りされてる先祖を供養し慰め救う事じ善根を積む それが盆の行事でんある。盆踊り お盆行事の功德によっち 餓鬼道かる逃るる事ん出来た 母ん姿に喜びんあまり 踊ったとん言う。お盆に帰っちきた先祖が 霊界に帰るにあたち 供養を受けち喜ぶ名残り惜しむ そこに盆の行事が営まれるごたる。

帰りん土産をくびったんが ヤセウマでんある。こんヤセウマはキナ粉じゃき 乾くと強くなっち切れん。じゃきいつまでん落とすことこのう 霊界まじさげち戻れるとか。盆にヤセウマを作るんも そげな優しい思いやりが 含まれてんおるんじゃあるめーか。

盆行事は推古天皇時代(606)頃から 先祖に対する孝養行事としち 伝承されち来たようじゃ。野津原に来た時にゃ今市ん 百円コーナーに寄っち見りよ 『ヤセウマも』売りよるき 今日どま1食これにしちみちゃ。暑さと盆も近うなったき ほんな又おしゃべりします、ダンダン。



あそび

こ

ども

も

んせ

界



『シイタケ山』に行く道も 春ち言うにまだ 手先も冷とっじ 半纏ん中へ手を入ると 末ちゃんな『お昼になるで』ち 言いに行きよった。と そんな時じゃった。羽ん美しい小鳥が サッと飛んだち思うたら ちっと前に舞いおれた。『あら かわいい』歩むめ止めち じっと見つむると 小鳥もジット見ちよる。

静かに 末ちゃんが歩くと こんだサッと飛びあがっち またちっと先に 舞いおりた。『あんた 元気がいいな』末ちゃんは 一人言いいながら こんだ ちっとはよう 歩いち側まじ行きかけたら パッと舞い上がる。

何回かくりかえしよると なんか まるで夢ん世界に おるそげな気持ちになっち とてん 嬉しくなりました。じゃもんじアブネ 山ん入口う 過ぎかけちしもった。『あんた元気しちよりよえ』声をかけち 飛びたった 小鳥と別れました。山にも陽がさしこんで来ました。

『もう お昼になるんで』『そうか ほんなイヌルカノウ』元気のいい父の声。『寒いこたねーな』 やっぱ 母親は優しい。もいだシイタケを かごに入れち 車に積むと 『こき乗れ』『あーい』末ちゃんも チョコント乗りこみ 帰り道じ小鳥ん話をしました。『りゃー仲良しが出来たんか よかったのう』

父さんが喜ぶ顔に 母さんも嬉しそう。元気に育ちよる子供が 小さな小鳥にも いつも優しくする そんな気持ちが親はどんくれ 嬉しい事か。『また 合うといいな』『うんあしたまた 来るかな』『来るかん知れんで』話が弾んじよる。そげなナカメ もう家に帰りち一た。

次ん日も山に入ると チュチュ小鳥ん鳴き声。『あらあの小鳥』末ちゃんな すぐ解った。嬉しかった また合えた。末ちゃんは冷たい山の中の道でも もう今日は元気一杯です。チュ チュ小鳥が 何か話しかけちよるごたる。『どしたんな』『……』小鳥はきつと 何か言いたいんじやろう。

昨日のごつ ちつと先に舞い降りちゃ 待つちよる。末ちゃんが刪まじ行くと サツと飛び立っち ちつと先じ又 待つ楽しみか。『そっじや 待ちよえ これ食ぶる』 オトシから取り出したな トイモン蒸すたの 半分つみ割ると 草の上においち ちつと下がった。いっとき見よったが 飛んで来た。『あ 食べた！』

小鳥も美味しいのか 口でつついている。『よかった』 じつと見てる末ちゃんも うれしいのかそこに じつとシヤガミくーだ。一生懸命食べてるんを見ると もう何日も前からん 友達んごたる。『おいしいー』『チュ チュ』 食べながら それがいかにもおいしいのか 声と身振りで ゆう解る末ちゃん。

人間とは違う暮らしかたん 小鳥。人間はいつでも好きなものをたべられる。でも小鳥は 自分で搜して食べないと 可哀相にも思う末ちゃん。しばらく見ていたが おなかが一杯になったのか チュチュと鳴くと 飛び去ってゆきました。『又合いましょう』末ちゃんはいつまでも 小鳥の飛んで行った 方を見ていました。

『こげな事があったんで』『そりゃまよ よかったなよ』 話を聞いた ばあちゃんもとても 喜んでくれました。『あしたも来るといいな』『うん きつと来ると思う』 でもそれから5日も来ないのでした。心配でたまらない末ちゃん。『大丈夫かな』ととても 心配になりました。

そして10日ほどした朝じやつた。ガラス窓の外に小鳥が チュチュ鳴いています。『あら あんた元気じやつた』 まぎれもないあん小鳥じやつた。

そろそろ お昼が近くなったようで 君ちゃんは家に帰って来た。百姓は 天気がよければ外の仕事が 忙しいので休みの今日は みんな畑に出ていた。お茶を沸かして帰りを待つ 仕事の出来るのを分けあってする。それが生活と解っていても 本当は遊びたい そんな年頃の君ちゃんでもあったのです。

家の入り口まで帰った時だった。見慣れない お坊さんが石垣の側に腰をかけている。ぺこんと頭をさげると その お坊さんも丁寧に頭をさげて 『ここで お邪魔してもよいですか』と 言うので 『はい』と 君ちゃんも返事しました。入り口でふと振り返ると お坊さんは包みを広げています。

見ると どうやら『お弁当』をあけたようです。君ちゃんは こんな事があったら ちゃんと『お茶』を 差し上げなさいと いつも言われていたので 急いでお茶をわかすと 持って行きました。『昼ごはんのようですので お茶をどうぞ』 そういって お坊さんに差し出しました。

『あらゝ本当に有り難うございます この子どもさんですか』
『はい』『そう 親ごさんがしっかり 躰してあるのですね 遠慮なく頂戴します』 お坊さんは両手を合わせて拝むと 静かに受け取った。なんとお行儀のよい お坊さんと 君ちゃんも 見惚れていました。一口頂いた お坊さんは『本当に美味しいお茶ですね』
『……』『お名前は……』『君子です』『そう』

そんな話をしている間に 家族も帰ってきました。この様子を見て 親は『日ごろ教えていた事を ちゃんとしてくれた』と 心の中で喜びました。そして父親が 『旅のお坊様でしょうが よろしかったら せめて縁先にでもお立ち寄りください』『有り難うござます ここで充分のお接待を頂きました』

母親は急いでダンゴ粉をこねると 引き延ばして『きな粉』をまぶし 竹の皮に包むと『娘が不調法でご免ください』『いえいえ 今時珍しいような躰の行き届いた』『とても恥ずかしい事で』『お陰で今日は楽しい おトキを頂く事ができました』『そんなに言われると 勿体ないことで』

君ちゃんは お茶を入れ添えて持ってきました。『お百姓さんは大変でしょうが 精出していれば必ず よい報いもありますので 病気をなさらないように』『ありがとうございます』母親も常日ごろから教えた事を ちゃんとしてくれた娘に 心の中で『有り難う』と 言っているようでした。

『何もお礼はできないが ここに持ち合わせている ナンテンの種をあげましょう。ナンテンには毒消しの 効果があるとされています。いつかきっと お役にたつかも知れません。』『それはありがとうございます』『葉っぱも美しいし 花も咲きます そして大きくなったら赤い実もなります』『嬉しいな』 君ちゃんは小躍りして喜びました。

『これ お口に合うか心配ですが ここらでは『ヤセウマ』と言います 旅の途中で お休みになる時にでも 召し上がってください 小麦粉ダンゴにきな粉まぶした 田舎の食べ物で』『これはありがたい 豊後の名物と聞いていました ヤセウマは お盆には欠かせず供えるとか 本当に心くばり有り難く頂きます。

お坊さんを見送ると 君ちゃんは『オカチャン ここに撒いたらどげー』『そうじゃな』 そりゃいいわ』 親にしてみるといつの間にか成長していた娘 旅のお坊さんを見送って ふと家でも『もしか』と あまりにも突然の出来事に 仏様の化身ではとおもったり 娘の接待したつい先ほどの事が 気がかりにもなりました。

あり合わせの昼飯を家族が 食べられる幸せ。それに比べ旅をつづける お坊さんはいったいどんな人だろうか。家ではとても その結果は答えが出ませんでした。

貰ったナンテンの実を お坊さんが昼飯をした場所に撒きました。どんな葉が どんな花が そしてどんな実が と君ちゃんはまだ 心がうきうきしてとても元気です。それに釣りこまれるように 家族もみんな元気に 不思議なくらい元気で『幸せな日々』が つづいていました。

『お前かたこん頃 オトロシ皆んなサカシイノー！ よその人たちが不思議に思う そんな日が続いて働いていたがある日のことです。『とったん ナンテンの芽じゃろ』君ちゃんば大きな声で言うので よく見るとそうです。ナンテンの芽がでているのです。あのお坊さんを ふっと思い出しました。

あれからどこまで歩いて行つたのだろうか 芽が出ると早いものすぐに可愛い花が 咲きました。やがて赤い実が秋にはなりました。『毒消しにもよいとか』 近所の人たちも『お影にあやかりたい』と 種をあげ家の周りに撒き何年か後には この地区の生け垣はナンテンばかりです。

『また会いたいなあ』 君ちゃんも18歳になりましたがあれから 会えませんでした。ナンテンの花を実を見てあの日の事が 思い出されます。ほんの一杯のお茶の接待から 広がった幸せで豊かな心。ずっと家族が元気なものあの日があったからと 振り返ります。施しに報いありは世の習わし。ナンテンの葉が飾られた 重箱の赤飯が届いたのも ナンテンのお影で捻挫せずすんだんと。きっと仏様が立ち寄ったのだらうと 心に思っているが……。

● ● ● 方言説明 ● ● ●

あんた元気じゃった…元気でしたか。冷とうじ…冷たくて。じゃった…でした。こんだ…今度は。ちっとはよう…少し早く。そげな…そんな。とてん…とても。じゃもんじアブネ…ですから危なくて。しちよりよえ…していなさいよ。イヌルカノウ…帰りますかなあ。こきー…ここに、この場所に。そげななかめえ…そうしている間に。

どしたんな…どうしたのですか。オトシ…ぼけっと。シヤガミクージ…しゃがみこんでしまって。あったんで…あったのですよ。

おトキ…食事の意味。豊後の名物…古い大分県の呼び名の食べもので 小麦粉で作る郷土料理。ヤセウマ…小麦粉を使ったダンゴを伸ばしてきな粉をまぶした食べ物。オカチャン…母親、おかあさん。どげー…どうです。オトロシュ…びっくりするような。サカシイノ…元気なのですか。とったん…父親、お父さん。すんだんと…すんだのです。

小鳥との方言の話し方にも 何回も話すうちに小鳥にもその 気持ちが伝わるのか 方言であっても人の優しい 心のこもった話しかけは きっと伝わるのでしょう。

旅のお坊さんにも土地の方言は いつも諸国を回って歩く途中で 話しかける言葉の端々には 難しさがあつたとしても 人の心はそれを乗り越えた 情愛によって解るものでしょう。もしかすれば仏の化身なのか 優しい少女の気持ちにお礼を そんな心か動いたとすれば まさに神か仏であつたのかも。ここは古くから人の住む 集落があつたと言う。

宇曾神様えの道しるべ

春ん『お中日』にゃ宇曾山に 参る人たちがガイト通る権現ん道。昔ここは櫛戸ち言う 浅内領地に行く本戸があった場所。すぐ下に『1里1丁』ん道しるべ 初めてんしでん迷わんごつん信仰しよったしが立てたもん。250歩ほず歩くとこんだ 次ん『ここから1里』ん道しるべ。

こんあたりゃ昔かる集落があった お宮もお寺も祈とう所も疫病がはやった頃にゃ救い求めた そげなしがお参りしたんじやろう。権現村ち呼ばれよった由緒も 栄えた証も残っちよる。浅内かる愛宕山に出た長者が 鷲ヶ城を築いた頃にゃ武家屋敷城務めする武士 行き来する人たちん姿が 奥座敷らしい情景を醸しだしてもおったごたる。

櫛戸ん石だたみを昭和になっち 改良しちそん記念碑ん側にお大師さまの30番札所、観音菩薩、庚申像も岩肌に安置して道中ん安全を念じたのか。登りつめた場所に大正始めに 寄進した鳥居もあり神仏合わせ祭った 面影も残っちよる。鳥居を潜ると程のう『35丁』ん道しるべ が建っちよるが3本並んじ 残っちよるのん珍しい。

浅内かる権現 愛宕山にでる道が西なら 東側を下る道に篝戸ん地名も残る場所。当時田んぼの多かった恵良村に 出るにゃこん篝戸が近かったき利用した。ここまで辿っち出ると 下の原に『宇曾神社のぼり道』があった そこに出るこちいなる。当時は一の瀬かる権現の櫛戸を上り 入蔵を通り山際に出るんが 幹線じゃつたが時代の推移 時ん流れじ移り変わっち行く。

道しるべはこげなふうに 交通ん案内をしちくるるき 村の辻わかされにはゆう 見られたが人ん優しい 心くばりが伺える。

奥の院まで麓かる約1里 古くは36丁と言っていた。そん1丁ごとに道しるべがあった。つまり奥の院かる始まち 36丁ん所が1里と言うこち一なる。正月、春と秋の『お中日』には 女性も奥の院に参られる いわゆる女人禁制の修験場じゃつた。厳しい山での修行には心の迷いは禁物。と男子だけの場所とされていた。

そこにはこんな秘話もあるよう。『女人は子孫繁栄の基礎であり健全な体調と 清々しい精神が要求される。それゆえに必要以上の体力消耗 危害に合わせてはならない。必要とあれば男子が代わって その保護に務め人の継承に 遺憾なきよう保護する』 それらを思うとき普通の山入は これを禁じるものである。

特定の日には父親が子を背に 母親がつきそって『虫封じ祈願』に参る。それによって健康な子供の 発育が約束されるもの。山の高度が約600メートルも 人間の生存には適当な環境 さらに山全面に自生している 『山つつじ』の芳香も 健康にプラス要素があると云われる。参る事の考え意義はそうした 諸々の自然環境にプラスされ 相乗効果となるのでは。

●●● 方言説明 ●●●

お中日…彼岸の中の日の意味で 現在の春分の日、秋分の日。ガイト…たくさん。そげなしが…そんな人たちが。こち一なる…ことになる。★ 道しるべ石柱は 現在数えるほどしか残ってないが 信仰する人の真心で寄進されたもの。寄進者の住所お名前も刻まれているが 風化によって消えつつあるのは 残念です。先の台風被害風倒木の杉も 明治以降に寄進によって 植えこまれたもので電気も付設されていたが 戦中に盗難にあつて廃止になったようです。

もらい湯のうれしさ

『隣りんババサンが 湯に入りきよち』 山から帰った幸助に母親が知らせたら 『もう入ってんいいん』 小学3年生になるとチッタ遠慮するのん 解ったごたる。『折角じゃきヨバルリゃいいこと』『あっこんしも 入っちゃらんじゃろうに』 幸助はそう言うとき こんだ藁切りを始めた。

農家じゃ暗くなるまじ 仕事はキリがねえ。ちっとでん加勢しちゃらにゃ 幸助は本当に優しい いい子どもじゃつたき 隣り近所んしも 目をつけちくれよった。馬屋ん方かる藁きりする音が 調子ゆう聞こえるもんじゃき 隣りんババサンが 腰のしのし歩いち来た。

『ふんとまゝ ゆう働く子じゃのう』 ニコニコしながら 馬屋ん方に行きよる。母親も嬉しかった そげ一言わるるんも 皆んなが見守ち 気をつけちくるるきこす。父親が長患いん後 昨年とうとうあの世にいった。親一人 子一人になったき やっぱ 隣りんババサンも苦になるんじゃろう。

『きりがついたら湯に入んな』『うん おおきに すぐ終わるき』『今日は寒かったじゃろう』『うん でん山ん中は わり温くかったんで』『そゝな ゆう働くなゝふんと』『そげんこた一ねえで ババサンな元気がいいな』『まゝな……』『いつも 悪いな』『やーそげん心配いらんで』

話が途切れかかると ババサンな上手に話しつないじ続けちくるるき 幸助も助かる。『えーとすんだ こりゃやったら終わるき』『そゝな せかんでんいいんで』『おおきに』 うれし涙が ほろり流れよるんが 幸助もゆう解った。手先が冷とうなち 本当はまだ甘えて一年頃じゃに。

『皆んながゆうしちくるるんは 親がみんなにゆうしちよりよったきで』 いつか隣りんババサンかる そげ一聞いたことがあった。親はあんまり口数はなかった じゃがする時 ぁきちんとセニャ 好かんタチじ几帳面。面倒見もよかったちゆう聞きよった。

父親ん事が思いださると 周りん人たちん そげな話が嬉しいやらと 今じぶんどうが皆んなに大事に されよる せん『お返しが出来るか』が 心配にもなっちゃつた。人の心は思った以上に難しい そげ一も思うと幸助は あれこれ考える事も多くなつた。

『ババサン 湯に入らせてな』『はい 入りよ ゆっくりしていいんで』『おおきに』 山仕事が子どもにゃ やっぱ 応えてもおったき 湯に入るな ぁダリも抜くるごたる。大けなアクビしたもんじゃき ババサン『子どもじゃのう やっぱダッタンジャロウ』

湯から上がったら 『こっち来ちママたべな ぁ オカチャンも来るき』『えーりゃーわる悪いな ぁ』『遠慮せんでいいで』 もらい湯の挙句に夕ごはんまじ よげるる幸助は 『オトッタン』 心の中じ嘸くと涙が 無性に流れ出ていた。

★★★ 方言説明 ★★★

チッタ…少しは。ヨバルリャ…入らせてもらったら。薬きり牛の資料の薬を刻む。あの世に…死去した。そげんこた ぁ…そんな事は。セニャ…しなくては。じぶんどうが…自分たちが。されよる…してもらう。ダリ…疲れ。ダッタンジャロウ 疲れたのだろう。ママ…この場合夕ごはんの事。



方言 単語

方言単語のひろがり
前回に続いて 方言
単語の説明を続けます。
同じ言葉にしても 意味が異なる事
の多い日本語。方言

ともなると 一層ややこしい聞こえにもなります。今回も分割してこのページから 35ページまで。ちよつと挟んで60頁から65頁。さらに95ページから 98ページと 掲載してあります。単語の広がりには 同じ言葉をさらに 意味が異なる別に分類しますから 3万語以上になりそうです。

お…オレチコンナ…おりに来ませんか、こちらに来ませんか。
オレタナツクロエ…折れたのは修理して、使えるなら修理。
オレチャレ…話に乗ってあげて、譲ってあげたら。
オレレンゴタル…気がねして辛い、息がつまりそうで。
オレグチャ…下りる方向は、下りて行く所は、下りたい。
オレチユウチャレ…居なさいと言うて、在宅を勧める。
オレチシモウタ…折れちしまった、折れて使えないかも。
オレタグレー…折れたぐらいは修理して、譲も得するが。
オレテンイインカ…折れてもよいのですか、在宅しても可。
オレドマ…私は、私たちは、自分たち、自分なら。

オレレン…折れない、居れないので、住むのは難しい。
オロイヤツジャ…気質の悪い性格、悪根性の持ち主。
オローハズ…居るはずですが、居ると思います、在宅予定。
オロトユルータカ…居てもままにしておいて、在宅自由。
オロードチ…居ようと思う魂胆、在宅のつもりで。
オロージミヨ…呼びかけて見たら、大声で呼んでみたら。
オロイゲネーキ…悪根性な、気質の悪い性格、異質人格。
オロシャキルキ…あろせば着るから、新しく着て見る。

お…オロシチョケ…下しておいて、下してください、卸す。
オロシチョケ…下品な扱い、後回しにして、外しておく。
オロシクジーチ…散々に卑下して、立場を悪くして。
オロイ…悪い根性、品物が粗悪な、誤魔化した物。
オワンジヨケレ…追わなくてよかった、背負わずに。
オワルリャニギー…追われたら逃げる手、攻めには避難。
オワリャネード…終わりはないから、止まりのない人生。
オワッテンマダヤ…おわったのに更に、執念深い性格。
オワリンソベ…終わったと思えば甘え、節度がないから。
オンタカナシ…なりふり構わず、わが道を行く性格。

オンジョキヤ…背負ってれば、子守の技法で、寝る。
オンゴオンゴ…予想以上に安定した炎、技法の極限の意。
オンガオラニャ…雄だけでは卵は、雌雌あってこそ。
オンハナ…ご祝儀、芝居の晶屑が出ず祝儀、心づけ。
オンニギシュ…賑やかな様の表現、ほめ讃える。
オンノジジャ…最高の出来映え、ほめ讃える、嬉しい光。
オントメンド…雌と雌だから、男女のつがい。
オンダコヨリャ…背負った子より抱いた子の情愛。
オンナモドセ…雌は戻しなさい、雌だけではな…どう。
オンヌワスルンナ…恩は忘れた振りをするのが人間。

オンダコトダッコ…おんぶした子と抱いた子、違くない。

か…カアラシメ…変わらないだろう、変化なし、変化は危険。
カアランゴタル…変わらないよう、たぶん変化なしと。
カアリメカノウ…変わらないか不安、自信を持つ事も。
カアルソバカル…代ったと思ったら変化、不安定。
カアザカノ…川の魚を、川で取れた魚、美しい水に住む。
カアカア…鳥、からすの幼児言葉、親しみのある鳥。
ガアガアユウナ…騒がない事、うるさいから、慌てない。

か…カイグイ……………無駄食い、帰り道での買ってすぐ食べる。
カイグイデン…意味もないような無駄食いするのも楽しみ。
カイレタンカ…帰って来れたのか、帰れてよかった、無事。
カイッチキタ……………帰って来たようだ、無事帰ったよう。
カイテンカイテン……………書いても書いても、連続に書いても。
カイデンカイデン……………嗅いても嗅いても、いくら匂っても。
カイランノカ……………帰らないのですか、帰らなくてもよいの。
ガイテイ…画びょう、壁に落ちないように止める紙つき釘。
カイチュウ……………財布、お金入れ、巾着、銭をいれる小物。
カイチョキナ……………書いておきなさい、搔いたら、描いては。

カイトカ…書いたの、描きましたか、搔いたら、欠いたの。
カイリヤマツチョル……………帰れば待っている、待たれる幸せ。
ガイトヤレ…沢山あげなさい、いっぱいあげて、ご虫屑に。
カイクウジ……………買いこんで、無駄にならないの、衝動買い。
カウナアワツツナ…買うにはよく考えて、無駄にならない。
カウコタネード……………買わなくてもいい、無駄になるから。
カウチイイヨッタ……………買うと言っていたが、大丈夫かな。
カウヨリヤ……………買うよりも、買わなくても代用で、節約。
カエンゴタリヤ……………買えないようなら、工面するのどう。
カエレニヤ……………買えないようなら、買えねば我慢か辛抱。

カエレメゴタル…買えないようだから、工面すれば何とか。
カエンチイヨル…買えないと言っているから、我慢も勇気。
カエチャリヤイイ……………変えてあげたら、変えっこしたら。
カエタナモドサン……………変えたら戻さないよ、取り戻し禁止。
カエチョリヤイイ……………変えておけばいい、変えれば役立つ。
カエタキユーウルル……………場所変えたので効果、場面転換。
カエコシタンナ……………交換したの、交互に利用する英知。
カエネンツクロイ…垣根の修理、垣根を斬新に、垣根修復。
カエルリヤイイ…買えられるならば、帰れるなら、出来れば。

か…カエラレンモンモアル変えられない物も、代えられない。
カエツタンカ…帰ったのですか、よく帰った事で。
カエッチヨカロウ…帰って安心、そのほうがよいのでは。
カエテンイッショ…帰っても同じでは、どこでも一緒。
カエトゥナツタキ…変えたいから、変化もよいのでは。
カエルリヤ…替えれば、変えたのがよい、変身も効果。
カエリュウカ…帰れますか、買えましょうか、交換どう。
カオブリャソロウタ…全員集合、メンバー勢揃い。
カオーチオモイヨル…飼いたい想い、買いたい問題は。

カオカクスナヤ…顔は見せて、顔が判らない、顔が主。
カオドチミヨル…買いたいから見ている、どれを買うか。
カオンイイナ…顔だけじゃどうか、美人美男は得する。
カオートン…買いますよ、買ってもいいが、買うが。
カオツクリュ…顔だけじゃ、顔と心も、肝心なのは。
カオガキキヤ…顔利きは助かる、口頃ん常識が左右。
カオグレ…顔くらいは、顔が物いうから。顔が信頼。
カガミクウジ…しゃがみこんで、どうした大丈夫。
カサムキ…大場物になるから、荷物になるので。
カカルンナ…かかりますか、搔かれますか、始めますか。

カカユリヤワリー…抱えたのでは、抱え所も問題。
カカエタカ…抱えましたか、そこは考え物の場所よ。
カガンジョケ…しゃがみ込んで、大丈夫なの、安静に。
カカエチョキヤ…抱えていれば、しっかり抱えて、安定。
カカジル…かきむしる、ひどく搔く、手荒に搔く。
カカエモウサン…抱えてもとても大変、手が届かない。
カガサンゴツ…壊さないように、欠けたら大変です。
カギナリ…鍵のように曲がって、角度のついた曲がり。
カキーアワン…間に合わない、時間が心配で。大丈夫か。
カキータンモ…隠したのも、隠す訳もあって、内緒に。

五助街道語



『五助街道ものがたり』 お名残り惜しい肥後街道

『それにしてん 五助さんなゆうまゝ ガイトんしどまと
ゆう知っちょるな』『まゝな それもお天んと様んお影じ
なゝ そげ一思うちよるんで』『そりゃまゝ そうじゃろう
が』『あんたとん 巡り合わせも やっぱ楽しかったで』
『あと ちっとじお別れじゃが 又いつか会いて一もんじゃ
な』『そげ一思うちよりゃ きっと会えるき』

『どげ一な こいさ小無田ん 宿に泊まるな』『え一荷物
たとげすんの』『こりゃなゝ 久住に明日でんいいち…』
『ほんとなえ』 旅んしも ほんの一日じゃつた 道連れが
けっくしゃもゝ 土地ん方言ぬ 覚えちよる。だけに別れも
辛うなった 五助さんじゃつた。

『そげ一しゅうか』 二人顔見合わせたのん 人ん巡り会
いん縁かん知れん。

☞小無田越ゆりゃ一里ん灯が見ゆる
あれが丹生山 練ヶ迫 ハ 七瀬のせせらぎ 紅葉が チラ
ホラ ホイホイホイ。

『ほら 赤ゑ茶店ん旗が ヒラヒラしよろう あっこ』
で一らでんあつたきかん知れんが 足取りも早うなった。心
ん通い合う二人ん 一夜ん宿にゃ楽しい時も 流るる事じゃ
ろう。今市ん茶店かる 後ろ向いたそん先に山が連なるんが
ここじゃもう で一ぶん高うなちよる。

宿場町らしい人ん行き来も 女したちん動きにもチョツピ
リ 艶やかさが滲みでち いかにも宿場町ら
しい。ここじ泊まるしたちん 草鞋う脱ぐ姿
も多くなつたごたる。こっちどうは 小無田
じ夢を見るとするか。

“アオよいさめよ宿場はそこじゃ あれか街道の石だた
み ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホ
イホイ”。

五助さんと連れのうち 旅んしも久住まじん 2里 っぽちば
ち 歩くこちなった。茶店じ『ヤセウマ』食うたら 腹が
おけたごたる。今市 肥後街道ち言うたり 豊後街道ち言
うたり 鶴崎街道ち言うしもあった。こん『おばね街道』
もこげな通りになっち 言葉、産物、祭り、行事、風習な
んかん 行き来交流が盛んになっち来た。

肥後文化、大野文化、直入文化ん交差点にもなっち あ
っちこっちん生活文化も だんだん向上したもんじゃき
こき一通した先見が見直された。子供ん遊びにしてん上品
さも入り 夏ん風物詩でんあった 螢 トラマエち白紙に
包んじ 窓辺らにぶらさげたり。盆の墓参りにゃ風呂に入
り 浴衣に着替えち薄化粧する習わし。『ひとぎひらい』
は父親ん許しをもらうち 化粧した上じ行くち言いよった。
『ひとぎひらい』にち 首かしぐるじゃろうが 棟上げ
する家ん人に礼を尽くす意味が 込められちよるち言う。

『亥の子餅』にゃ 大黒さんと言う人は 1人で俵をふ
んばって 2でニッコリ笑う 3で杯さしおうて 4つ世
の中よいように 5ついつでもご鬮に 6つ無病息災で
7つ何事ないように 8つ屋敷を買い広め 9つここ
にとどまって 10でとうとう納まった ドッサリ祝うちよ
くれ……亥の子植じ地面ぬ叩いち 祝う習わしじゃった。
地面ぬ叩くな 地固めん意味も 土ん中ん害虫を追い出
し モグラ退治にも役立つち言いよった。子供心にん育つ
世の中ん決まり礼儀 そげなんが自然と身につく時 人生
も素晴らしいもんになるんじゃろう。

生活文化は人によっち開くもん

家ん中じ鶏う飼うそりゃ卵う 生んじもらうんが目的じゃが そこに人と動物《人間も動物じゃが》とん 優しい関わりがあるんじゃろう。咄嗟ん来客に何はのうでん『卵吸物』が そこらへんにあった野菜 シイタケなんかと時の間に出来る。『かたくりぜんざい』でも 葛どまありゃそりゃも っ お客さんがいつ来てん 慌てまくることもねえじすむ。

こげなふうに『おぼねじゃき』 あっちこっちん文化も『ちよいと寄っち見ろうか』ち こちなるき知恵も貰いだす。富山ん入れ葉回りんしも 昔しゃ幕府ん 隠密兼ねちよつた。じゃき全国通行特別許可も 情報周知なんか役割も果たしよったんじゃろう。

直入文化が入ったんも練迫なんか 早うかる生活文化が来たき 丹生ん化粧もあつたんじゃろう。心が豊かになると 自然と取り組みん 好奇心も湧いちくるもん。盆踊りや口説きん猛者もでち盛大な踊りにゃ よそかるも見物に来たち。長老が語るけんど自分の自慢にせんじ 後継者がおつたきち言うあたり 心ん段差も汲み取るる。

『そうしちみりゃ今市ゃ新しいごたるが けっくしゃ早うかる偉えしが 才覚見せたんじゃろうな』『まゝそげなことじゃろなゝ そり氣候風土がそげ一したんか 寒さを逆手に取つた能力ん生かし方が よかつたんか知れんな』 五助さんも連れに褒めらるりゃ もう嬉しいぬじっと堪えた。

街道はデー道じ馬も今日は足軽い 連れにちつたオダテラレタ そげんこたのうでん巡り合わせた 人ん心が溶け合っ話も弾み次々に 出ちくるもんでんあつた。

『夕立にあった ママ事遊び』

ゴザを敷いた庭先にゃ春ん陽ざし ナンテンの実やスイセンの花が タカナン葉っぱん上に並っじよる。子供心んご馳走を男の子に勧むる女ん子は もうお母さん気取り 『うめえ』『そうじゃねえこと』 子供ん世界は大人えん世界に 自然と進みよるごたる。『だんご汁わ』『おりゃ好かん』『そげんこつ言うて悪いわ いいど ち言いよ』

ふたりん遊ぶ子供ん世界は 食べ物ごっこかる山や田畑じ働く事にん移っち行く。と そんな時じゃつた にわか雨が降りて一た 男ん子は急いじゴザをたくね 軒下え引張りくうだ。西ん空が暗っなっち風も出た 雨はやみそうにもねえ 家ん中かるババサンが 『こっち上がっちきよ』ち声が するもんじゃき着物んスソうっぶるうと 顔見合わせち側に来た。

『お医者さんごっこするな』『うん』女ん子は素直に頷くと男ん子に従うた。純真な子供ん世界はいつん なかめえか大人ん世界に近寄っち行く。そげな知恵がついち行くきこす 安心も出来るもんじゃちババサンも 火焼きう出しち勧めた。子供んママゴト遊びも生きち行く為ん 本能でんあるんじやろう。自然界ん摂理は子供心でん 無意識に覚えち行くもん。

火焼き食うてん雨は止まんもんじゃき 子供は眠とうなったんか ふたりともゴロット横たくり。そんなまいつん中めえかスヤスヤ眠っちしもった。そんな横顔ゃ童心純真無垢でんある。

天領ん石合番所

江戸期に入ると天領地日田ん 出番所が石合に出来た。役人を配置した豊後ん元締めとしち あらゆる職務を司ちよつた。

★ 野津原方言と共通する『京、大阪で使われる方言』

コシイ……………ずる賢い	オーキニ……………有り難う、感謝
ズリー……………のろい、悪賢い	キバル……………力む、頑張る
タボウ……………大事にする、けち	ハタカル……………開く、広げる
チンメー……………小さい、経済家	ホメク……………蒸し暑い、発酵する
ナエル……………しびれる、不自由に	ヨダキー……………大儀な、疲れた
アゴタン……………口やかましい	オツクリ……………料理の刺身、刺身
オチョクル……………上手にあしらう	ヒネル……………つねる
オトンボ……………最後に生まれた子	オトコシ……………男、男たち
テカケ……………隠し女、内緒の女	ドダイ……………だいたい、そもそも
インデ……………帰って、よいから	アゴンジョウ……………おしゃべり
ウツツガッツ……………同じくらい	イヌル……………帰る、戻る
エブ……………荷札、表せん	ガナ……………ばかり、だけ
コンメー……………けち、ちいさい	チギル……………もぎとる、とる
テゴ……………加勢、手伝い	ドダイ……………とても、だいたい
トット……………まるで、そこまで	ニジクル……………なすりつける
ネンシャ……………念入り、几帳面	ツベテ……………冷たい、冷淡

こげなごつ大阪、京都、神戸あたりじ使わるる 方言にゃ野津原じ使う方言と共通する 生活用語が残っちよる。方言は参勤交代なんかによる輸入ん方言…じゃがきつと優しかったき 思い出に残ったき持ち帰ったんかん知れん。それじ親近感も増しち共通んイケウチんごたる…言葉がアクセントが違うてん 根底に流るる心ん中にゃ真心こもった ふれあいが育っちよるんじやろう。

方言がこのように使われち育ち守られち 今も生き続けちよるな ぁそん背景にゃ 人ん心んふれあい何かが結びついちよる証。遠く離れちよつてん情愛ん真心は その土地に素朴な花も咲かせちくるるもん。400年あまり過ぎてん歩いた道の片隅ん 優しい言葉はいつまでん心ん中じ香り高く咲いちよるもん。

五助街道物語… 湛水から今市

湛水に出た水路に水の爽やかな響きに 五助さん思わず自慢の “水の流れが涙で曇る よくもここまで情水” 馬子歌が周りん山肌に響いち 馬が上手に嘶いち相槌う入る。連れのをたお客も聞きほれち 『よう五助さん もひとつ』 そんな声に釣られち続く。 “在所恋しや歩けば 3里 山が高うじままならぬ”

湛水う出た二人ゃデーラ道う 今市に向かうち歩くと 山波みん遙か向こうにゃ 晴るりゃ海もシルルガ 今日ちちょっと曇がかかちそりゃ無理。でん歩くしにゃいい按配ん天気。『もうすぐ今市じゃな』『でえふん覚えたごたるな』『そうぐれか こんだ悪い時お代わりゆするで!』。

そんな今市にゃ岡領ん『お陣屋』がある。肥後ん殿様ん行列ん時や『お茶ん接待』もあっち ここじイットキよこうが そげな事もあっちこん道ゃ『肥後街道』ち 呼ぶけんど肥後んしゃ『豊後街道』ち呼ぶ。お互いが相手う大事にした 心くぼりでんあったんじゃろう。

野津原宿場かる約3里 もうこれかる先おデーラ道じあん赤坂石だたみ 矢貫石だたみ、矢原石だたみ、そしち坂口太田ん石だたみも 嘘んごたる坂道じゃつたきほっとする そげな気楽さが気分ぬ ゆったりしちくるる。『もうすぐヨコワルル』ち 思うと足取りも早うなった。

『こげん高え所いゆうこげん町が出来たんじゃな』『そうで 元々家がナカッタんじゃが 岡ん殿様が 大野川添いん道だけじゃねえ 『おばね道』う作ることじ 政治経済ん発展ぬ狙うたんが 苦勞もあるが当たったもんじゃき

こげな立派な宿場町になったそう。来てが少くのうじ庄内朽網なんかかるも移住 60戸ほずが町並みう揃えたが 山火事じ類焼悲惨な目に。でんすぐ立ち直っち今の形が出来たそう。冬ん寒さ 大雨に道が荒るる そげな難儀う乗り越えち 石を麦庭谷かる運びあげち 敷きつめたんがこん街道。見た目にもハイカラじゃろう。

石ん敷込みにゃ肥後ん石工も 通行ん世話になるよしみじ応援したち言う。あれかる300年も過げたに 今もビクトンせんな基礎が シャトシチヨルかるじゃろう。石だたみんな上をポックリ下駄はいち 歩く娘ん姿どまそりゃ絵になるで。『そり一馬子歌もなえ』 五助もコックリ大きゅ頷いた。

『そりやそうと水がそげ一あるんかな』『そこが今市ん不思議んひとつじ 独特ん堀方うしちやるんで』『ほうそりゃまたどげな』『て一げん井戸は堀さげちよきや自然水が湛るじゃろう じゃけんどそれだけじゃ 水がきまっただけじチットひもじい』『ひもじいえ』『こりゃ少ねえきん事 じゃき途中で四方に広めた 水たまりゅ作っちゃう。そき一フトロク湛る仕組みになっちよるき 汲み上げてんなかなか水面が下がるん』

『そりいここわ久住山系ん水脈が通っちよる』『ほほう有難えこつじゃなふんと お大師様んお影じゃろうな』『それもあろな 常日頃ゆうしちよきやいい報いもあるんじゃねえ』 水脈をうまく利用するそげな才覚んしがおったんかん知れんな』『なるほど』『なるほずチギル秋なすびち言う』『なにえ そりゃあ付け焼き刃じゃろう』『ありゃあんた そげんこつ知っちよつたんな 隅おけんな』『じゃき中えおるんで』

茶店ん旗がヒラヒラ靡きよると 馬が止まったんもんじゃ
き 茶店んばあさんがニンジンぬ 食わせよる。商売熱心ち
言うか意地汚ねえんじゃねえ 情愛が人ん心う優しゅ包んじ
くれた。『ちょいと一服するな』『いいなゝ喉がイロイタじ
ゃろう』 馬が奥かる返事ゅしよる。

“白熊獅子舞い祭りの夜は 恋にこがるる出会い橋。” そ
げな場面ぬ想像しち 連れん客は『なんか面白い話しゅ』
『こげな話しゅあんまり知るまいが 新しい話しゅじゃがこん
側ん万生寺に 素晴らしい釣鐘があった。大きな事でん そ
ん音色ん事も優れちよったが 戦争じ供出するこちなった。

じゃがヤンガチしち戦争も済んだが そんな鐘はどき行っ
たんか 今どこにあるんかカイモク解らん。オシナギーカナじ
ゃが今でん勿体ねえち惜しまれちよる。寺に関わる話しゅも
ひとつ…先代ん安楽寺ん住職は戦前の 布教活動ん第一人者
じ 国内は勿論中国ん北京じゃ 1月あまりも教えを続けち
そんな後インドなんか各地にも 活動したち言う。そんな語り
方話法ん巧みさに 聞く人たちん悟りも早かったとか。

『そうじゃも一つ 鍬下年金ち言う話』『そりゃあんまり
聞かんなゝ』『ここんそべえ流れよる井路が 出来た頃ん話
じ畑を田にすりゃ っ一定期間税を安くする そげな取り決
めがあったんと。それじ無理しち畑を田にしたが 田にする
に銭がかかち借金じ したまじゃよかったが 一定期間が
過げち借金が払えんじ 結局又地主に戻したしもあった。

米が取るるないいがやっぱ 地主と小作じゃ厳しかろうが
これも 宿命じゃつたんかん知れんなゝ。『地主さんでんと
てん理解 協力する人たちもあったが そんな話しゅ2つ3つ
しゅうかなゝ』

お合言葉



お オッタシナ……………いたのですか、ご在宅でしたか。
オッチョル……………いますよ、在宅のようで、家にいます。
オッチョコチョイ…中途半端な性格で、落ち着きがなくて。
オテングツセニャ…落ちないように注意して、落下に用心。
オテツキヤ……………落ちてしまえば、やっと安心できました。
オテンバン……………賑やかな性格、落ち着きのない。
オテランセッキョ……………僧職のお話、寺での法話。
オテショニャ……………小さな皿に、箸で別けて取る皿。
オテクウジ……………落ち込んでしまって、油断して落ち込み。
オテショ……………小さな小分けして使う皿、手塩皿のこと。

オテシコ……………落ちる所まで落ちて、予定とおり落ちて。
オテタデ……………ご飯を移しました、食事の準備が出来た。
オテチョケ……………ご飯をついで、移して準備しておく。
オトンコモネーガ…静まり少しの音も聞こえない、静感。
オトコシャ……………男の人たちは、男は、男性の人たちは。
オトシニャ……………ポケットには、洋服の物いれには。
オトロシヤカマシイウ…るさいほどの音がするが、雑音が。
オトコトイツショヤ……………男性と一緒にいたよう、敏感。

お オトリモチ…お接待、お客さんの接待役、相手に合わせて。
オトモ……同伴、連れなって、いつしょに行く、音も大事。
オドリマクッチ……真剣に踊って、踊りのクライマックス。
オドカシャ……びっくりさせると、急に声をかけると。
オトムーシチ……お供をして、同伴する、道連れになる。
オトツタンノ……お父さんの、父親の、お父さんの場面。
オトナシュデン……おとなしくても、人間ほどほどが。
オドシランド……私たちは知らないから、全く知らない。
オドカテ……私の家に、私の方に、家に寄ってください。
オトキ……葬儀の膳、葬祭の食事、死者を送る日の食事。

オドウドマ…私たちは、私たちの場合は、こちらの考えは。
オドオドシチ……恐怖心を抱いて、怖さを我慢して。
オドウドン……私たちでも、我々でも、自分がその場なら。
オナゴシンサンワキ……女性のお産の後、お産した女性の。
オナシモンナ…同じものなら、似ているようで異なるかも。
オナゴンナガユ…女性の風呂すきな、ゆっくりできる空間。
オナイドシン……同年令の、年が同じであっても。
オナジカオデン……似たもの顔もある、おなじ顔でも心は。
オニギリヤ……おむすびの、握り飯でも、にぎりご飯の。
オニヤラジャラ……奇想天涯な、怪物が現れる場面か。

オニンホトケゴコロ……頼み人の仏心、見かけによらぬ人。
オヌシガ……お前が、貴方が、見かけによらぬ性格。
オヌガン……貴方の、相手の、お前のものである。
オヌドマ……お前なら、貴方であれば、相手の性格が解る。
オノガン……お前のものでは、貴方のものでしょう。
オノレン……自分の物、相手の物、お前の物だろう。
オバジョー……おばさん、親の女姉妹、義理のおばさん。
オバンカテ……おばさんの家に、おばさんの所に。
オバリユウカ……おんぼしてもよい、背中におわれたい。

お オバレテン……………おんぶしても、背負われても。
オバレタナ…おんぶしましたか、気持ちよく背にもたれて。
オバルリャ……………背負われればすぐ寝る、気持ちよく背に。
オバレチョケ……………おんぶしておきなさい、背中にすやすや。
オビグリャ……………帯くらいは準備して、帯はすぐ解るように。
オヒサン……………太陽、おてんと様、お日様、陽の光に感謝。
オヒサモ……………お日様を、太陽を見ると、無くてはならない。
オビバンテン……………背負いに使う半纏、暖かく子守する半纏。
オビタガリャ…おんぶしたいのなら、子守したいようなら。

オビタカロウニ……………子守したいだろうに、子守に愛着も。
オブナリャハヨ……………おんぶするなら早く、子守なら早く。
オブンカ……………おびますか、子守しますか、背負いますか。
オブオビィ……………おんぶするのに使う帯、子守帯イツケ帯。
オブサッチョル……………おんぶしている、おんぶされている。
オブカセイ……………おんぶして加勢する、子守加勢をする。
オブソバカル……………おんでいる側で、子守する側に用事も。
オブニヘーレ…お風呂にはいりなさい、お風呂に入ったら。
オブウニヘーレ……………お風呂に入ったら、入浴しなさい。
オブゴタリャ……………おんぶするなら、子守するのなら。

オベレテン……………おんぶできても、背負い子守出来ても。
オベリュウカ……………背負い子守出来ても、子守は大丈夫か。
オベタンナラ……………背負えたなら、子守出来たのなら。
オベルリャ……………おべるようでしたら、子守が出来れば。
オベンチャロ……………上手言うけれど、調子はいけれど。
オベタマジヤイガ……………おんぶは出来たものの、長続きが。
オボエタンカ……………覚えましたか、よく解って覚えた。
オボレチ……………水に溺れて、深まってしまって、のめり込み。
オボンサン……………僧侶、お坊様、僧職の親しい呼び方。
オボエチョケ……………憎たれ口、恨みの捨てせりふ、放言悪態。

お オボエシナ…覚えてばかりの時に、覚えてすぐに、覚えた。
オボエソコネチ…間違っていて覚えたので、勘違いした覚え方。
オボユリヤイイ…覚えさえすればいい、おぼえれば得に。
オボエタガリヤ…覚えるのが嬉しいようで、真剣覚える。
オボドチ…おんぶしようと急ぐ、背負うのに急いで。
オボルリヤ…溺れたなら大変、溺死の心配があって。
オマイドマ…貴方たちは、皆さんたちは、貴方は。
オマヤ…お前は、貴方は、前にいる人に向かって。
オマケニ…余分に、さらに、サービスに、特別に。
オマケ特別に追加して、付録として、サービスに。

オマイカテ…貴方の家に、相手の人に、相手の皆さんに。
オマイリヤ…参る、参拝する、懇ろにお参りする。
オミーナエ…重たいですね、重たくて大変、思ったよりも。
オミーチョケ…思っておきなさいよ、恨み言葉を言う。
オミケンド…重たいけれど、予想以上の重さに。
オミカリヤ…重いようなら、持ち余すようなら。
オミキャ…神仏に供える酒など、祭りに供えた酒など。
オミコシャ…お御輿は、祭りの御輿は、手作りの飾り御輿。
オムテンイエ…思ってもなかなか言えない、口重たくて。
オムツカシュ…接待に愛想の挨拶、不調法の言い訳。

オムチョキャイイ…思っておればいい、心に納めておく。
オムヤコス…思っていればこそ、心に密かに想い合う。
オムタナ…思ったならば、思っていれば、心に止めて。
オムテン…思っている、想いながらも、想いが伝わらず。
オムカロ…重たいでしょう、重たいのでは、重くて大変な。
オムジコマル…重たくて困る、重いので困難している。
オムケリヤ…重たいなら、重いようなら工面もよいが。
オムーナイイガ…思うのはよいけれど叶わぬ事もある。
オメクスンナ…性交するかえ、性交の違反厳罰、責任を。

お オメクデージ……結婚までは処女で、軽率は女性を不幸に。
オメコンハツワライ…初夜の輝く笑顔、結ばれる華燭の夜。
オメシニシチョコクレ……ご飯にしてください、食事にして。
オメシンネキジ……食事の側で聞きにくい、食事時の陰話。
オメシンワキ……食事の後先で、食事後のゆっくり休息。
オメレテーノ…おめでたい事で、慶事の会場で、心の祝杯。
オメデテーヤツ…少しのろまな性格、呑気過ぎて場所違い。
オモイウーチ……思いあいながら、相談しながらよい方に。
オモヤコス……思っていればこそ、思い合う心の絆、共栄。
オモシリ……滑稽で楽しい雰囲気、頼もしい場所づくり。

オモトデン…重たくても、重いから価値もある、苦勞の宝。
オモイブッチ…よかれと思ったのに、気が聞きすぎて失敗。
オモカリャオケ……重たいなら下ろしたら、無理は禁物。
オモシャイイド……重石はよいだろう、適材適所で。
オモテガオ……表面を作る上手者、顔が効く切符の持ち主。
オモーチョキヤ…おもっていればよい、気に止めておけば。
オモダツタ……代表の人たちで、有識者で、話が早く進む。
オモイダサンキ……回想できないので、記録を確認して。
オヤヨリャアンシャ……さすがに親より達者者、親より子。
オヤマジデチクル…子供の喧嘩に親が口出し、よくある話。

オヤドマナラエ……親に見習えば、年長には知識が満タン。
オヤニャニヤワン…親にゃ似合わない子が、おやより達人。
オヤスネー……おやおや当てられそう、そう思っていたが。
オヤウニュトレ…田植えの親綱を曳く、後はうえるに早い。
オヤイマノコセ…親芋はこのこさないと来年が、親は大事に。
オヤカマシュ……煩くてご免なさいね、話しすぎて。
オヤコヨリャ…親子よりは他人がよい時も、親戚より他人。
オヤンコガユウ……親に似つかぬ明晰才能、親より子亀。
オヤタネ……田植えの綱取り基礎、後は念者の見せ所。

お オユジヌクミー……湯で暖めて、湯でゆっくり温めりゃ。
オユカルイジー……湯でゆっくり湯がいて、茹でいて料理。
オユージュョケ……泳いでおりなさい、ゆっくり泳いで。
オヨギヤスメ……泳いだら潜ったら、泳ぎの基本を覚える。
オヨデーシヨヤ……親を大事にせんと、親孝行したい時。
オヨグリヤ……泳げるなら次は潜って、水難には注意を。
オランジ……芽がでなくて、叫んで、折らないで、不在で。
オランコチナル……不在になってしまう、転居して行く。
オランキ……いませんよ、不在です、留守しますから。
オランダン……いなくても、不在でも、立ち寄って。

オラビタクル……叫びマワシテ賑やか、煩い叫び声。
オラニヤマトノ……いないなら又来ます、留守なら又。
オラレンカ……不在ですか、るすならほかの機会に。
オラブ……叫びまわる、高い声で大声で叫ぶ。
オリー……おりなさい、下がってきなさい。
オリツゴツケチ……私に都合つけてください、是非お願い。
オリコエチ……お利口さんと皆んなが、利口な幸せ者。
オリコデン……利口でも嫌われ者も、嫌われ者は損。
オリヤシメ……いないでしょう、留守しているのでは。
オリュウミチ……都合のよい時に、機会を見て話を。

オリーチョキヤ……下ろしておけば、下に降ろします。
オリューカ……下りましょうか、降りて行きます。
オル……います。在宅しています、家にいますから。
オレソベ……私の側に、側にきてください、私の近くに。
オルハズジャ……いると思います、在宅のはずです。
オルカン……居るかも、居るはずです、居ると思う。
オルゴタリヤ……居るようなら、居るようでしたなら。
オルンジャロー……居るでしょうから、居ると思います。
オルジャロウカ……居るでしょうかそれとも、不在かな。

五助さんの 『思い出日記』 から

肥後街道を温見んほうに 今市經由じ上っち行くとして 何回
か振り向いちゃ『やっぱ俺どうかたん 里はいいりう』 手褒
めしちゃ 馬んヒズメう伴奏に 馬子歌う歌いだす。

アオよ 勇めよ宿場はそこじゃ あれが街道の石だたみ
ハ 七瀬のせせらぎ サラ サラ サラ サラ
ホイ、ホイ、ホイ。

宇曾に 出ようか 荒木に行こうか 四辻峠の思案顔
ハ 七瀬のせせらぎ 小鮎が スイ スイ
ホイ ホイ ホイ。

アン娘 年頃 姉さんかぶり いつか覚えた馬子歌を
ハ 七瀬のせせらぎ モミジが チラ ホラ
ホイ ホイ ホイ。

ヒョイト後う振り向いたら 旅んしたちか 5, 6人が
聞きながら ついち来よる。顔見合わせた 五助さんな唄お
やめてえぬ こげんしの気持ちも 察しち 続けたもんじゃ
き すんだら 拍手喝采。

あんげさね こんげづり歩くうち
思いでもいっぱい。それも 五助さんがん 人柄じゃきか。
今日も のぞかな馬子唄に 乗せられち ほら 皆んなづり
旅は道連れ 人生双六ん 人と人ん心が きもちが 連れの
うち歩く……肥後街道。

『巡り合わせの人生双六』

『ゆう来たな一道い迷ゃせんじゃつた』 もう久しぶりに逢うた嬉しさと まるっきり夢んごたる今が 若え娘んごつ興奮しちしゃべる話が あんげこんげつーじよる。近所じ育ったもんじゃきいつも 親んごつゆーしちもろーた。親にオコラルルと飛うじ行っちゃ大けな背中ん後り隠れち『仕方ねーやっちゃ 五助ぢいさんじゃき……』ち 親が許しちもくれた事あさいさいじゃつた。

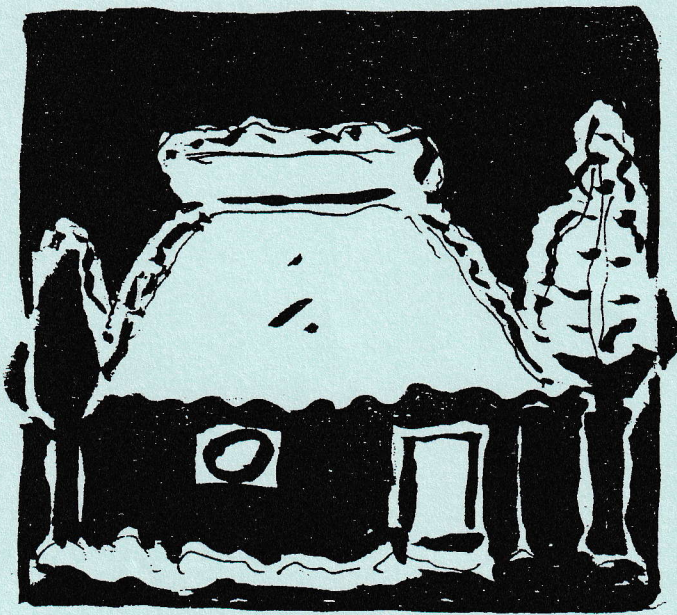
いつんなかめ一か太っち娘ざかり 嫁ご見に来た時も半分行きて一半分行きと一ねーち 散々手を焼かせたけど それが縁じゃろういい婿じょうと 虫も殺さん夫婦になっち幸せんいのちき。いつん仲間えか教えもせんぬ一覚えち 子供も生まれそんうち孫も出来た。まあ誰でん教えんでんゆうしたもん ちゃんと暗隅でん具合ゆうするんぬ 若えしは心えちよつた。

商いん仕入れがあっち何十年ぶりかん 帰り道ちよいと顔が見とうなっち 『寄ってんいいか』ち前ぶれしたら 『絶対寄って』ち待ち焦がるるごたる返事が来た。『もうちったばあさめ一なったかん』 心ん中じゃそげな悪ふざけもしち あげな顔こげな別品まじ想像した…お里。今あ脂の乗り切った熟れすぐるごたる 女ご盛りじゃき色気もありそうじゃ。

『いいところ一おっち良かったのー』『おおきに』 子供の頃とちとん変わらん方言が飛びで一たに 五助は心んそこかる嬉しかった。そり一白い肌かる笑顔がこぼれち 自分の子供以上に愛情が湧くのん こんめ一時かる育てたようなそげな 気持ちも自分がん頭にも体にも流れちよるからじゃろう。『元気がいいんか』『うんこげ一な』 ちょこっと横向き加減の癖が残る…お里。意地らしいち言うかむげねーち言うか 五助ん全身ぬすり抜くる肉親の情愛が自分にもおかしいごつ感じられち ぼっと赤うなっちしもった。

五助

新及語



上がりくうだ座敷じひげ面ん五助に お里はよっぽず嬉しかったんか 髪にちょこんと座っち両手じ抱きついた。とちめんぼ一振った五助………じゃが考えて見りゃ無理もねー。50年振りか今まじ考えもせんじゃつたが 『寄ってんいいか』ん そん一言がこげーまじ人の情けん絆う揺り動かしたんか 昨日まじ考えもせんじゃつたんが セキを切ったごつ逢いたい気持ちを燃やす。

これが人生じありコンメエ時に受けた 情愛が開花する刹那かん知れん。五助もじゃが お里にしてんまるで父親に 久しぶりに逢う喜びん思いがもう絶頂に差しかかちよる。『アーヌキー』……それは何を意味するんか 取りようじゃ色にも情にもなるが お里ん気持ちはそげな上ずったものじゃのーじ 夢を見る人間世界ん宝物ー一人占めした そげな気持ちかん知れん。

五助もしっかり抱きしめちちとずつ 震いよる熟れた女ごの動きに 年がいものー若がえっち力が思わん入った。『気持ちイイ』女ごのため息じゃなかるうが 生めかしゅうもあるそん言葉にゃ親んごつ ふんとゆう育てちくれいつまでん忘れんじ 心い思ちくる人間の情愛に流れ落つる涙が 節くれだった五助ん腕う濡らしちよる。

『いつまでんそげーしちよつてんいいけんど ちょいと待て痺れが切れち足がジンジンする』『ありゃーご免 しょうわねーな』髪から飛び下ると 両足う撫でマワシ チャルト しがめた顔が安心さしゅうち思うち 笑顔に変わった。『しょわねー』『うん』どうかこうかゆうなごたる五助。女盛りに乗りかかられち足もむげねこされ。ジャガこれも巡り合わせん人生双六か。

束の間の甘えは お里には千秋の思いがあつたんか 人の感情は生きていればこそ尊い情感が醸し出されもする。『こんだいいど髪が空いたき』『………』 お里の気持ちを察した五助ん真心。

えーとジンジンする痺れがゆうなった。そりゅー待つちよつたごつ 『しよわなかつた……』『……』五助はわだと顔しかめち見たが それ以上は お里を騙し悲しますんな出来んじやつた。『もういいど こんだ襷組んだきしよわねーき 座れ』『ちゃーいいん』 お里は遠慮の一何か甘えと一なった。

あれはいつ頃じやつたか 夏の暑い盛りじやつた。干し草うしち昼寝でんツルツツしゅうかち思いよつたら グワラグワラタ立ん雷が鳴りで一た。つぼのはなじ遊びよつた お里がタマガッチ…座に飛びあがりよせん五助にしがみち一た。ワサボウン雨が遠慮の一背中う頭う濡らしち 五助は忙しう手拭いじ お里をツンネイチ拭いちゃると 雷んおじいのと抱かれた嬉しさがそうさせるんか 五助に真剣抱きちいた。

裸じ抱きついた白い肌ん お里は親んごつ甘え取り違えたんじゃねーかち ゆう若いもんかるセガワルルが……。そりゅ全く理屈にゃならん話じゃき 五助もよきムドナギーんじやろう。雨が激しう降るそん音が子守歌んごつ聞こゆるんか 鼾うかきで一た。まあなんちゅうえーらしい子か じっと見つむる五助ん目にゃ潤むごたる光るもんが見られた。

裸にしたままんまん お里は安心しきっちダツタのんあるか 寝息に時折よっぱずいい夢でん見よるんか うぶ笑いが眺めらるる。足が又ちつと痺れち来たがこんだは グユウラシュハ言われん事ちなच्चよる。折角ココンコロユウ寝ちよんに 起こすなムゲネコサレじゃ。じっとずらしち足を縮むると寝言んごつ 『悪いちゃ』『わかつたわつた』 無言に答えち元に戻すと又うぶ笑い。

あげな事もあつた お里との人生双六にゃ親子以上ん 絆があるんじやろう。ふんともう甘えち…ひょいと言いてえぬ一堪えち顔う覗き込むと お里も『あげんこともあつたなえ』『お前も……』

そげな夢物語りんごたる時間が流れよる。人生ん一生にゃこげん
恵まれた時間も来る お里が思い続けていてん叶わん夢じやった。
がふっと湧いたごたる50年振りん夢は まさ夢じゃきなりふりも
構わん甘えが極く自然に出たんじゃろう。五助もそりゅー自然に受
くる心ん優しさ お里はどげな宝物よりん嬉しかった。



ひょいと気がつくとお里は五助に抱かるること肌
ん温もりう満喫しちよる。『ああぬきー……気持ちい
い』目を閉じちもいつべん『気持ちいい』ち言
うとなんか子供んおごりんごつ五助ん髪を叩くと
降れた。それは自分が普通ん女に戻ったお里ん今の
五助に感謝する気持ちん現れじゃろう。

『もういいんか』五助は未練んごたるお里ん温もりうじっ
とかみ締めちあん乳くせー子供ん頃にシメシう替えた湯に入れ
ち白いドイモンごたるぬ手拭いじコサギアライしたぬヒョカッ
ト又回想しよった。生まれた時かるとん年まじ関わったごたる人間
の不思議な巡り合わせはそげな絆に結ばれちよつたんじゃろう
。

『湯がわいたが入らん』『やー湯をオゴッソナロウカ』いつ
もと変わらんつもりが我にかえちくると恥ずかしいごたる気持ち
いになったのんお里ん立場を考えんじ行き過ぎたんじゃあるめえか
不安と不吉がチラッとよぎる。『久しぶり背中う洗うちよるでいい
じゃろ』五助は『いや』ち言うとなんか情愛を無にする。けんど
こん上甘やかすなどげじゃろうか……

丁度そん時い娘ん子が帰ち来た。『あらちいちゃん来たん』
弾む声かそこいらお駆け抜けるごつ響いた。『来たてお前いっしょ
に寝てーち言よたっじゃろ』『寝てんいいの』天真爛漫の子供じゃ
ろうそん言葉んはじに素直に育てたお里ん心くばりが五助ん胸う
又じーんとさせちほろり涙かこぼれ落てた。煙てえだけじゃねー。

お里ん孫娘と広い湯殿につかち ダリが出たか目をつぶったら
『ちーちゃん』 ダマシ大けな声じタマガッタ。目の前い両手じ作
った水鉄砲を構えちよる。『りゃーオジノー誰かる習うたんか』
『ばあちゃん』 はっきり物怖じせんじ言うなんか お里にゆう
似ちよる。『ふーん うまいのー 飛ばせきるか』『うん 行くで
』ち 言うたかち思うと シューシュー ひげ面を見事ねらい打ち
されちしもうた。『まいった 降参降参』

湯殿ん騒がしいんに お里がつーじ来た『又やらかしよる…ふん
ともう 誰いにたんかのー』『お前じゃろうが のや』『それで』
孫娘にピシャリ言われち お里もグーモ言えんじやった。3人が大
声うあげち騒ぐもんじゃき 近所んしまじがタマガッタゴタル。笑
うなーいい事 笑顔がありゃ家ん中おアカルージ栄えもする。

次ん朝おちっと曇ちよるけんど 暑うのーじいいかん知れん。
高台に案内しちやると眺めがいいもんじゃき 真剣喜くうだけんど
ソウコウシヨルウチ 悪いこち一雨んやつが降りでーた。ゲドサレ
今日に限ち降らんでんよかろうに 相変わらず口がサカシイお里
。持ちよつたチット破れた傘 五助さんこりゅうさして…やんな
…うっとうはいいき お客さんが濡るると悪い…ほんな相合い傘ち
いくか…カタヒキヨセチ相合い傘にゃ 五助もまんざらなえ。

お里もソクー狙うちよつたんかん知れん。『ちゃーいいん 甘え
癖がつくとついち行きと一なるで』『ほんな行くか』『えー…』
本当は お里も嬉しいんかん知れん。50年振りに出会うち甘えち
こんだ相合い傘。若いんなら手を取り合うち歩きてえが それはち
っと虫がよすぐるか。お里の気持ちは心は悦びの絶頂にあるような
昨日からん流れ。五助もまた生まれた頃かる関わち来た 娘がま
るで自分の子のごたる甘えように 年う重ねた今思い残しもねえ
有意義ん時間に流れてちよる。これが巡り合わせん人生ち言うんか
。傘を濡らす小雨が二人ん肩を濡らすのか 気を効かせるのか。

五助なりゃこす似合う馬子歌

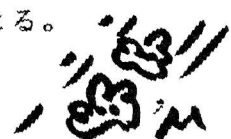
本降りになっち傘がちっとこんめえき肩が濡るる。辻ん地藏堂に駆けくうじ腰っおり一た。ニクシイゴタル雨に お里は内心ほっともしち恨めしそうに外を眺めた。然し内心はなしか複雑な思いも…もしこんまま足止めになれば 五助も『も一晩泊ませちもらおうか』ち こち一なりゃしめ一か。

雨と風が無情に強くなり周りん木木まじ揺らす。『こりゃまゝコマッタコンニャキナッタド のや お里また一晩宿賃なね一けんど泊めちくるるか』『いんげんな 悪いで』 それだけ言うといち早っ打ち消すごつ 『うそ嘘で 泊まっちゆっくりして』『……』 すぐ帰らんでんいいんないいが 五助もチョイト迷うた。

お里も泊まってくるりゃそりゃ 甘えと一もあるしもうそう長う生きちよるた考えられんき 思い切り世話もしてあげてえ。両親もねえ今ん お里にゃ親以上に世話になった五助が 親とん同然な身でんあるき 子供も孫も成長した今は『親ん代わり面倒見よ』ち 神様が言うのかん知れん。

横殴りん雨が堂ん中まじ入ちくる。憎らしいような嬉しいごたるこん雨。これが人生双六ちでん言うんか 50年振りにヒョカット出てきち 立ち寄り泊まっち思い切り甘えもした ほん一時じゃがイヤンバイン雨じ 又一時あまえてんいいごたる。五助も覚悟っ決めち『こいさま一晩泊めちもらおう』『……』『いいじゃろう』 もう悪いきい何か言いどころか待ちよつた気持ち。

そうなるともうゆっくりも出来る。お里も料理んことよりこれかる過ごす 五助おとったんとん時間ぬ どげ一楽しゅう過ごすか心の弾みと 恩返しする巡り合わせた時間ぬ 考え巡らせちよつた。雨は惜しげものう降り続いち 止みそうにゃね一ごたる。



雨じゃきか曇空はすぐ暗くなる。『ゆうげ』んこた一娘たちがおるき……そり一五助さんぬ案内しち出た……娘たちもやっぱ泊まるかん知れんち 分は入れちよるじゃろう。親ん恩人た一何べんも聞いてんおるし こげん時こすヤウチが世話せにゃ笑い者んになる。雨なら泊まるんじゃねー…孫はもう泊まるち決めちよる。

雨が途切れたかち思うたら大人げの一 小走りじ相合い傘じ泥ばねしち帰っち来た。『なんもそげ一慌てんでんよかったろうに』セガウゴツ娘が言うと 『それがもう 帰るち言うもんじゃき』『アリュミヨ ウチニ帰るち言うたんじゃろう』『あーそっじゃつた』『もうフント アワテマクッチ もう年寄りゃ仕方ね一なあ』娘に冷やかされち お里も顔赤めたけんど まんだらでんなかったごたる。娘ん心くばりい世間ぬ踏んだち感心もした。

『二人きりいしちゃれ ふんと気が効かんの一』 婿が小声じ言うと『ばあちゃん 五助とったんぬ しゃんと世話せにゃ 赤恥うかくで』セガイきしょくじ目じ合図すりゃ 若え頃う思いで一ち胸がじーんと疼く。『はいはい 解ったきほんな 頼むで』 言い訳に取られんごつ素直に聞いち 濡れた礎さきう拭いちゃる。

昨日かるん巡り会わせた束の間ん 心弾む気持ちゅ娘たちちもう知りぬいじよるが そり一気取られんごつ振る舞う お里の何といじらしく初々しい事か。娘夫婦もなんか幸しゅう貰うような 悦びが全身を暖う包うじくれた。これが人生ん心ん幸せとでん言うんか物や金じゃ替えられん宝物かん知れん。

奥座敷に通されち五助も泊まる覚悟決めちよつた。お里も又こいさゆっくり話も弾ませち……『五助とったん』 いきなり五助ん後ろかる抱きついた。五助も察しちよつたんか前に両手じ 抱き回すと頭からしっかり愛撫しち 女ん成熟したあん甘えん坊を 改めち見直し成長を喜ぶ雨の夕暮れ。



娘夫婦が気を効かせち奥座敷にゃ 2つん寝床が行儀ゆう敷かれちよる。一足さきに座敷に入った五助は さっきん興奮かる時間がたっちょらん事もあっち おもはゆい気持ちに誘われちいく。こんまま甘えてん何も恥ずごたるこたー ねーけんど2つん寝床が行儀ゆう並ぶと なんか窮屈ん気持ちにさせらるる。

思案しちよると お里が無動作に入ちくるなり 『うっとうはいいで心配せんじょつて』 ちらり横目じ見ると返事を待ちよるごたる。『そうじゃのう 折角じゃき一緒に寝るか』『入ってんいい』 ちよいと間をおいたが 『いいど お前はしょわーねんか…困りゃせんか』『なしえ……………』『いんにゃ なんでんねえ』

外ん雨がシャンシャン降りでーち トタン屋根う叩きよる。忙しいごたるがこれん 物音消すにゃいいかん知れん。五助はタアイもねー事う考えちしもうたと ちよいと反省したら 側に来た お里がいきなり小声じ 『何う考えちよんの』『……………』 図星う刺されち タマガリクウジしもうた。女ごん知恵はどこまじ早う回うんかち 度肝抜かれたごたる。

田舎も雨じゃろうな……そげな事うぼやっと考えちよるんか ちこっと座るらお里を見ると いじらしい格好しちあん頃そっくりん姿。『お里 今幸せん真っ盛りじゃのう』『……………』『お里 何う考えちよるんかえ』『あ……………すみません ちよいと昔ん里んこつヒョカット思いでーち』 やっぱそわそわ気分があるんか。

と そっと側に寄り添うごつ来ると 『唄歌ってな』 だまし言われたなーいいが 夜に唄どま歌うと大事ななりゃしめーか。五助も肝つ玉大げなしん積もりが ここまじ来るとショボクレアガッチョル。『明日じゃ悪いか』『なしえ』『なんぼなんでんここじゃのウ悪るかう』『そんじゃなあ』 素直に言うことを聞いてくれたにホットした。明日は聞かせにゃムゲネーち五助も覚悟決めち。

昨日ん雨が嘘んように晴れちマバイゴタル 陽がさしく一じよる座敷。お里はあさげん台所か姿は見えんが ふわっと女ごの匂いが座敷に残ちよる。『五助トツタン』長年の世話になった思いで50年振りに巡り会う『人生双六』 空想と現実ん世界ん中じ五助も 思わん夢も見らせちもろうた。

高台に上った2人はまだ滴んおつる 木の下をよけち歩く後かる来た お里がそっと腕に巻ち一た。よっぽず期待しちよつたんか 腕んぬき一ほず燃えちよるごたる。『そうじゃ 馬子唄聞かせて』しばく考えちよつたが 『そうじゃの一昨日言いよつたのや』 いつかは願いを叶えちやりて一 それほずまじ自分の下手な唄でんいいんなら……五助もどんくれえ嬉しいか知れん……

“ アオよ いさめよ 宿場はそこじゃ あれが 街道の石だたみ ハァ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ ”

こだまが返ちくるごたる 五助ん洪い歌声が あたり山かる山に響き流れち行くんが。聞きほれた お里の心ん中にゃ あん子供ん頃い抱かれち 子守歌代わりに聞いた声と 同じ声がここじゃまるっきり 違うごたるのん 年を取ったかるか それとんそげな聾肩分に聞こえたんじゃろうか。五助ん顔う見直しもする お里。

『元気しちよれや 楽しかったどお里』『……』 何も言葉にならん お里ん心境。もしこのままサヨナラしたら もう逢えないんじゃあるめ一か……かなり年もとっちヨロケも目立つごたる。今もちっと側におっち世話しちやりてえ……母性本能がむらむらと……でん 頑強じゃきショワネエ 自分に言い聞かせち 『おとつたんこすサカシュシンナァエ』 それだけ言うとじっと顔を見つめた。

“ あん娘年頃 あねさんかぶり いつか覚えた馬子唄を……。

か…カキンシブウチ………柿渋で補強をする、柿渋で丈夫に。
カキヤ……掛けておいて、間にあったの、書くのが上手。
カキマデ………具たくさん入った料理、五目飯、混ぜ飯。
カキニュツクロエ………垣根を修理する、垣根の補修。
カキンカオクエ…柿の皮を干し食べる、柿皮の糖分利用。
ガキマミレ………暴れん坊たちの仲間に、大勢の友達と。
カキムシッチ………ひどく搔いて痛める、無性に痒くて。
カキタクル………酷く搔いて癒す、気乗りして書いて行く。
カキクウジ…描いているうちに外にはみ出す、大胆な書。
カキーオウタ………間に合ってよかった、やっとの思いで。

カグロミリヤイイ…神楽を見たら、神楽見物したらどう。
カグラビョウシ………神楽の拍子、神楽を舞う伴奏。
カクウチャ………店先で升飲み、帰り道のちよつと一杯。
カグロ………神楽を、神楽でも、神楽に関心があって。
ガクンチクル………がっかりしてしまう動作、落胆限界。
カクリユウドチ…隠れようと思って、隠れね機会だから。
カクルルネキ………隠れる側から、すぐ見つかってしまう。
カクルルソベ………隠れる側に来て、隠れた側に尻尾が。
ガクガクスル…身震いで落ち着かない、恐怖心で揺れる。
カクンナラ………搔くのなら、書くのなら、描くならば。

カクサンデン………隠さなくても、隠しても解るようで。
カクモウチ………匿ってあげたら、隠したのはよいが。
カゲチョリャコス………かけているからこそ、欠けている。
カゲーネェゴタル………影がないような、影が薄くなって。
カゲベラ………影のある方に、影を使えば口向は有効に。
カケ Chol………欠けているので、掛けてある、書いてる。
カケネジ…儲けも入れた、手数料も加えて、儲けも入れ。
カケン………欠けない、掛けない、書けない、描けない。
カケネン………掛け値で販売、少しは儲けさせて、儲けも。

か…カゲチヨル…欠けている、壊れている、揃っていない。
カケタゴツ…掛けたように、欠けたのでは、揃わない。
…書けたように、欠席、亡くなった、歯が抜けたように。
ガケンハト…崖の端っこ、崖の回りを、崖の周辺。
カゲンヤ…欠けないの、壊れない、欠席しないの。
カゲクボ…影の窪たまり、奥まった口陰、口陰の場所。
カコーチヨル…囲っている、囲いになっている、個室。
カゴージ…しゃがみ込んで、しゃがみ静かに、足痛か。
カゴーデンミュル…かがまなくても見える、目線が下で。
カゴントオシミィ…籠の戸を閉めて、閉めないと出るよ。

カゴゴツ…嗅いで見る、匂いを確かめる、籠と一緒に。
カゴドチ…かぎ取る、かいで見ようか、筈をかぐ。
カゴモンナラ…かぎ取ったりすると、芽をかぎ取る。
カコタンモ…囲ったのも、囲ってしまうと、囲い終えて。
カゴージョキヤ…かがみこむと、かがんでいると。
カゴメチョケ…縮めておけば、縮めて小さく、凝縮する。
カゴメ…山芋の弦についた芋、山芋の種になる芋。
カゴジョル…かがみこんで、ひっそりとかがみ込んで。
カザシミヤ…風の吹く先の方、風の流れる先、風の下手。
カサヌリヤ…重ねると、積み重ねた、次々と重ねて。

カサンナ…貸してください、貸してほしいが、借りたい。
カザクルーチ…状況察知して、悟りが早くて、巡り早く。
ガサガサシチ…煩く動き回って、騒々しくして。
カザカミヤ…風の上手、風の吹いて来る方向。
カザシモン…風の下手の方向、風の流れる方向。
カサースグ…上手はすぐです、傘はすぐ出します。
カサデン…傘でも、上手の方向でも、水の流れ来る方。
カサニャナルメェ…貸さねば、貸してもよい、貸します。
カサンツウ…化膿して出来た皮膚の固まり、かさぶた。

か…ガサゴ……うるさいほど動く子、一時も静かにしてない子。
カサンシャ……上手の家の人は、上手の人は、貸さない人。
カサンホウ……上手の方の、川の流れに従う上手。中心の方。
カジュウ……火事を、火災をしては、火元にならないよう。
カジンハイヨセ……火災後の片づけ作業、火事の後片づけ。
カジメテン………束ねても、固く束ねる、縛ってまとめる。
カジドマシチミヨ……火災を起こしては、火元になると大変。
カジムリヤ………束ねて、まとめて束ねる、束にして整理。
カジケンコ………寒がりの子供、寒さに震えるような。

カジュウシャント……舵をしっかりと、舵取りが大きな責任。
カジャクレント……貰わないように、貰って儲けにならぬ。
カシュモラエ……貸したのは貰わないと、貸したら返して。
カシャヒヤイヲ……貸したら利子を、貸したぶんには利息を。
カジケボウ……寒がりの子供、寒さだけでない性格、寒弱子。
ガジガシ………霜煮えした芋類、凍傷にかかった野菜の味。
カジベーイソゲ………火事場に応援に、火災の類焼に放水。
カジュスンナ……火事は絶対禁止、火災を起こさないよう。
カスリタバク……寸借たばこは返した試しない、品いい貰い。
カストキャ………貸すときには確認、貸すときは用心を。

カスルクセ……貸せとは裏があるのでは、貸すには用心を。
カスグレナラ……貸すくらいなら与える、貸して貰えるか。
カスデン……粕でも、粕の利用が料理の幅を、粕の漬け物。
カスナネエド……貸すのはないから、断り上手な言葉使い。
カスンナラヒヤイヲ……貸すから利息を、かしてもよいから。
カスッチ………こすりあげて、瞬時に取る、擦り取る。
カスージョル……震んでいるよう、ぼんやりしか見えない。
カズユリヤ………数えて見る、数を読む、確認して見る。
カズヨメ………数を確認する、数えて見る、数は間違いない。
カズンジョ………数は多いが、数でこなすのも、人数も味方。

か…カセイド…加勢に来て暮れた、応援に来てくれ、思わぬ支援。

カセガニャ……働けば利益がついてくる、健康で働く幸せ。

カセギャコス……稼いでいればきっと、努力は報えられる。

カセタラツク……柔らかになったら餅つき、タイミングが。

カセクルルワイ…加勢に来てくれるそうな、応援が来るから。

カセチョリャ……柔らかくなっていれば、餅つきの時間。

カゼニャキヲツキ……風邪と油断は禁物、風邪は万病の元。

カゼンコジサカシイ…風邪に強い子供たち、暑さ寒さに強い。

カゼヨキュ……暴風林、暴風囲い、風の被害もおろそかには。

カゼグリャ……風くらいと侮らないよう、風邪から潜伏病も。

カゼンフキヨシヤ…風向きでは大きな被害、風の噂も命取り。

カゼンコモネエ……鳴りが静まる不気味な、平穩無事が一番。

カソドチ……餅つき準備にもちこめをかす…水につけて柔く。

カゾエチョキヤ……教を確認して、品不足にならないように。

カゾエチャ……教えて確認、教えては覚えてゆく、算教勉強。

カゾエテン……教えてもおかしい合わない、どこが間違いの。

カゾズリ……角の方に、角を曲がって行く、確かに見たが。

カソーセエチャレ…傘をさしかけてあげたら、濡れないよう。

カゾエチョカニャ……教えて確認する。間違いは許されない。

カゾヨキュ……個別寄りから外されては、嫌な予感が走る。

カソモンナラ……貸したのなら貰えるか、貸す前に確認を。

カタッパシカル……全てを網羅して、残さないよう、お任せ。

カタッチョケ……加われば、仲間に入っていれば。人並み。

カタカタ……片一方の、チグハグな、別の物を合わせて。

カタツロー……片側の、片一方の、反対側の、表裏別々。

カタヨッチ……変則的な、片寄ったから、表裏まちまちで。

カタゲボウ…担ぐ棒、荷物を担ぐ道具、農具の一種、担い棒。

カタイッポ……一方の分、反対にもある、表裏が一つになる。

カタメデン……片側でもよく見える、左右の目の検査。

か…カタナシジャ……面目まるつぶれ、品が悪い様、まいった。
カタリヤ……加われれば、嘘の上手な、参加すれば、話し方。
カタランデン………参加しなくても、仲間に入らなくても。
カタパシカル……そこらじゅうのみんなが、左右上下まで。
カタモネーゴツ………すべてがなくなって、消え去って。
カタグルソベ……担いでいる側に、担ぐ準備している側に。
カタラニヤ……加わらないと、仲間に入らないと、話さねば。
カタゲモウサン………担ぐのに負担が重すぎる、担げない。
カタツレ………片側の、片一方の、反対側の、対照的な。
カタグリヤ……担いだならば、担いでみると、試しに担ぐ。

ガタットン……微動だに、少しも動かせない、安定した様。
カタンナ……加わるは待て、仲間に入れたい、仲間はずれ。
ガチメチャネエ……束にしてはないから、束ねてはないので。
ガチャガチャ……騒々しい、雑音が多くて肝心の、口八丁。
カチャシメ……勝たないだろう、勝ち目はないが、勝は無理。
ガチブルウ……寒すぎて震う、寒さに震い騒ぐ、極寒の寒さ。
カチノニ……勝ったばかりに、勝った直後に、勝った途端。
カチブリヤ……勝った様子はさすがに、勝者の雄姿は輝く。
カチマクッチ……勝ち続けて、勝ちがついた試合、連続勝者。
カジムリヤ………束にして、束ねて準備、束にすれば後は。

カチドマヤレ……たまには勝ちを譲って、負けてあげては。
カチンカチン………固まってしまう、緊張して固くなる。
カチカチ………固い、緊張して、勝ち進む、弾む音がする。
カチダリュ……煮て乾燥した粟、縁起物の粟、非常食用粟。
カツリヤイイ……加えたらよい、仲間に入れたら、加える。
カッテン……勝手口に、勝つても威張らない、仲間に入れぬ。
カツンカツン……やっとの程、精いっぱい量の量、正確な量。
カックリカヤス………かき回して乱す、あたり構わず掻く。
カッチスリヤ………勝手にすれば、自由にさせておく。

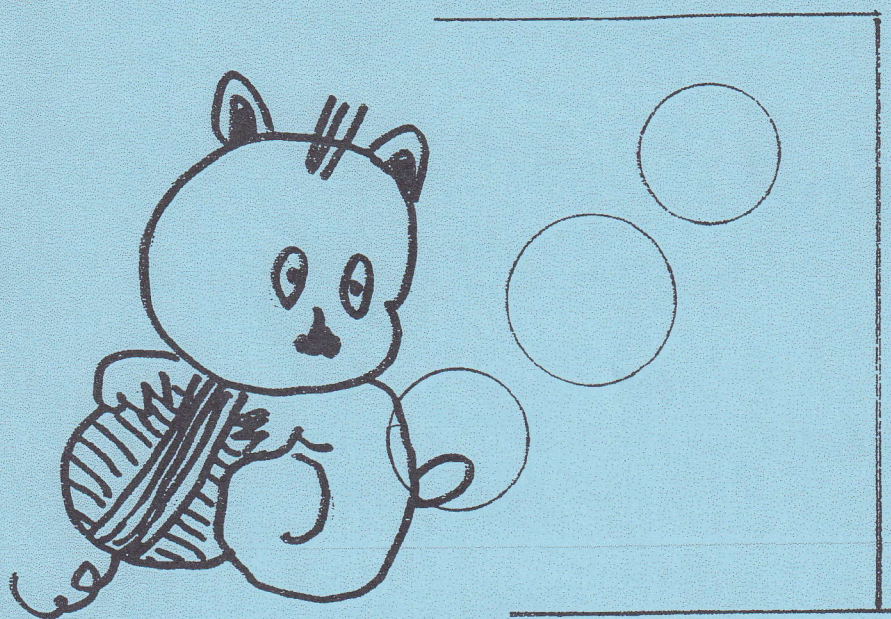
か…カッターント…借りたのです、刈ったので、勝ったので。
カツンカツン…やっとのありさま、ぎりぎりいっぱい。
カッスル…加勢する、支援して、味方になる、加えて。
カツリャヤオネェ…加えると大変、仲間に入れては心配。
カツヨメ…数を調べて、正確な数を、多くの経験を。
カッタナモードセ…借りは元に、手間がいお互いに。相互。
カツユリャ…教える、教えてみる、数の確認。
ガツガツ…貧しい行動、騒々しい音が、震えるような。
カツカツ…やっとの、なんとかなりそう、一杯にはなる。
カッチクル…借りて、勝つて帰る、刈って来ます。

カテーダケジャ…物固いだけでは、律儀物ではあるが。
カテーキ…固いから、几帳面な性格、固まって、強固。
カテレン…勝てない、勝つのは難しい、加えられない。
カテラレン…加えられない、仲間に入れない、混ぜない。
カテチマゼチ…加えて混ぜ合わせて、雑多に入れ混ぜる。
カテチャロウ…加えてあげよう、仲間に入れて、混ぜる。
カテーニ…固くて、固すぎて、歯がたたない、隙間なし。
カテベラ…片いっぽう辺、反対側、裏側、表と裏面。
カテンコツ…加えない事を、仲間に入れぬ、混合せぬ。
カテェコツ…物柔らかかに、無礼講で、気ままにやったら。

カテナァ…仲間に入れて、加わってもよい、混ぜても。
カトドチ…勝つ気満々で、勝たねばと意気込む、絶対勝。
カドンサキュ…角の先を、曲がり角から更に進んで。
カトコシヨル…肩から馬力が越し出る、精力が満タンで。
カトークリャ…固い対応なら覚悟して、正式な方法で。
カトノウジ…固くないと信頼が、きちんとしないと。
カトクビレ…固く束ね、緩まぬように、きちんとせねば。
カトキビレ…固く絞めて、きちんと束ねて、品よく束ね。
カトンイタミュ…肩の痛みが心配、肩の捻挫の痛み。



女性の底力



子ども会の歌づくり

戦後間もねえ頃じゃった 本町に子ども会が出来ち 青年団やら詳しい人たちん世話じ 100人ぐれが活躍して一た。まだ負けた戦争ん後味があっち 皆んなも落ち着かん時じゃき 子どもたちだけでんち取りくうだ 狙いはよかったごたる。会員な100人あまりが班ごとん 班長んもち一なかなかゆう纏まっち そりゃもう『たいしたもん』じゃった。

大分市じあった子ども会ん 連合大会にも参加しちバスにゃ 子ども会ん 幟旗も立てちボンネットバスも 目立った日じゃった。そんな頃『子ども会の歌』を作ろう そげな声が出たち 思いよったらもう出来た。『こりゃいいんじゃねえ』リーダーが そんな頃貸し出し文庫ん関係の 大分図書館長に相談したら そんな頃NHK大分放送局ん 児童合唱団指揮者ん先生に 話しちくれ すぐ曲をつけちくれた。

『恵みの光り身に受けて 集う心の僕私 慈愛の園に微笑みて 我ら若草子供会』……すぐさま練習しち 会んたんび歌い 中学校ん校舎落成式にも 出演しち披露したもんじゃき 有名になっち喜くうだもんじゃった。子ども自身の取り組んだ作詞が 思わん所じ輝いたごたる。

毎朝ん走った後ん体操にゃ 親たちも早起きするち喜び 健康ん裏づけも出来たごたる。そりーちっと悪い時『しよわねえか』ち たんねちも見らるるき 便利もよかったち言う。土曜日ん夜は集会があっち 場所に困ちよつたら空き家を使うてんいいち世話しちくれ 電気まじ引きこんじくれた。歌を作る それも自分たちの歌になると けっくしゃいいもんじゃち 自慢もしとなっち何かん時にゃ 決まっち歌いよった。子どもん純粹な気持ちは歌を通じ 友情にも広がったごたる。

子ども会んしの家が初盆を迎ゆる 『皆んなじ盆踊りを』
話は早えき青年団に言う と 一緒に往還じしゅうちこちなった。
娘たちん着飾ったぬ見ると 『ちょこっと光るもんぬ付けち
ゃどけーな』 ガラス屋さんがガラスん端っ 上手に切つちく
れち皆んなん襟元に。

ラジオ屋さんが電蓄ん応援しちくれ 夜ん電気ん少ねえ頃に
往還な ひときわ賑やこうなった。時折通る定期バスも止めち
お客さんも そこじ降ると見物しち 喜かうじくれた盆の夜。
あんころん子ども会員が 今はもう地域ん中堅になっち 他
に出たしたちも盆帰りますと 話題があん頃にタイムスリップ
する。

なしあつこまじち振り返る時 時代の発展ぬ先取りした 子
どもたちん能力英知が 評価もさるるような想いがする。年は
かさねたが子どもも 孫も出来た今あん日
あん夜の薄くらい往還じ 無心に踊った頃
がふっと浮かび上がっち 底力になった心
ん閃きは強い絆に 結ばれちよつた子ども
ん世界が 素晴らしかったんかん知れん。



地区に残っている人たちが 当時を垣間見る想いに掻き立て
られて 『おれどうのう子どもん時にゃ』ち 言うのは遠慮し
てん心んなかにゃ やっぱ自負心が輝いちよるじやろう。女性
はふと回想した刹那 『今からまたやろうか』ち 斬新な知恵
が燃ゆるち言うきい 頼もしいもんじやち感心する。

導く人や幼き子 苦しみ喜び分けあえば 緑の丘に花も咲く
我ら若草子供会……時おり口ずさむ時 懐かしく当時が忍べ
るのは 幸せな人生でもあろう。女性とは強いものだが優しく
もあるから 長く底力も蓄えちよるんじやろう。

◎◎◎ あん娘（コ）達者か ◎◎◎

嫁にアルイチもう半年 母親にしちみりゃ娘んことが 心配になっち夢どま見るともっ 気持ちまじイライラしよる。親父が見兼ねち『お前 用事でん作っち行っちくりゃいい』『そげんこつーえ』 行きてー気持ちと ナンボナンデンち思う気持ちが ヤリヤイヨル。

急く仕事もあるし『アレなりいシヨロウ』ち 自分に言い聞かせち仕事ゝ始めた。

娘ん方も『家じゃ甘えてんじょうじゃつた』 今にナッチみると何かナサケネエやら ハガイイヤら。始めちん事ん多い家ん生き方ん違い。それでん慣れにゃもう 今更帰る訳にもいかん これも生まれ育った宿命でんある。

そげな事ゝ考えたりしよると 義母が気を利かせて『せわしゅなかりゃチョイト 里に行っちクレンナ』『……』タマガッタぬ知らん振りっしち 『種モヌこん前頼んじょつたぬ 欲しいき貰っち来て』『はい』 もう嬉しさがそこまじ。ぐっとこらえち 『何の種物を』

忙しゅうシコすると 車を走らせたが心はルンルン。道行くシタチガ挨拶すんに 殿様気分スピードじ快速。時のめ一家に帰りち一た。母親は相変わらず仕事がせわしいゴタル。顔を見るとタマガッタような 『ドシタンナ』『義母さんが種物を貰って来てち 言われたケンド 本当は……』『ジャロウ』

『まゝあがりよ』と言いたい気持ちを グットコラエチ母親は 『あっアレジャツタンじゃな』 合点したんか奥かる包みを 下げち出ち来た。『こりゅうあげて あんまりユックリセンジ帰らにゃ 心配するで』『……』 顔見ただけじいいんで 義母さんの気持ちも ソリィちゃんと答えにゃな』

しぶしぶ帰る姿に 本当はせめて茶デンち。じゃがここじ甘やかしたんじゃ 義母ん心くばりに背くこちなる。『今日は早う帰りよ 元気な顔見タキもう安心したわい！ ツマランゴタル娘デンこれが世渡り上手ん コツ鍵かん知れんこち 娘もえーと気もつき知恵も湧いたごたる。

義母も『もう晩方まじゃ帰るめえ』ち 思いよったトゴロ何と時のメーニ帰っち来た。そりい種物だけじゃねえ 珍しい野菜まじヒトサゲ。相手もテーシタモンジャち 思う女ん執念じゃがソゲナ付き合いによっち 万事がうまくユクモンデンアル。着替えするとすぐ自分の仕事に そりゅ見ると『やっばうちん嫁は』ち ちっと自慢もしとなる。

一週間はずしち雨になった。義母が朝はよかるゴトゴトしよる。『お義母さん早いこと』『あんな 今日雨降りジャキ こりうお母さんに届けちクレン そしちユックリシチ来ればいいわ』『ちやよすみません 内の母はとてん好物じ』『ジャツタなえ』二人ん笑い声に年寄りたちも 起きて来た。

務め合う事ん大切さもあるが 義理ユエン相手を立てる事も 交際上手とん言うか お互いが『損しち得取る』秘策でんある。嫁を介した親戚同志が 上手な付き合いによっち お互いが円満に過ごせるにゃ ヤッパなんちゅうテン『女ん底力』が 大けな役割うはたすこちなる。

『ホンナ行っち来ます』 こんだは公認の里帰りタイム。足取りも母の好物ん土産も 寝そべる時間があるんも 雨様様でんあった。車ん音に敏感な母親も すぐ解ったき雨でんあり『ゆつくりするじゃろうき』 慌てもせんじ顔じゃ迷惑そうに『何事な』『チャーリャ 解っちよるくしー』『そりゃ言わんことで』 もう二人とも抱き合わんばかりに 喜び一杯の時が流がるる。

◇◇◇ 夫を戦地に送り出して ◇◇◇

大戦も激しさを増して男手は 皆んな出征しちしもった。なしウチマジエエ ちドマ言おうもんなら『非国民』ち 烙印ぬベタリ張らるるごたる時代。仕方ねえわなち『お祝』になる。乳飲み子グレドコロカ まゝこん世に出ちよらん そげなしもお国ん為じゃち見送られた。

それも暑い盛りん麦狩り最中 『お前かたいいのう男がおるきハカドル』ち 近所んしが羨ましがられよった。がそげん夢はもう一瞬パット消えた。アゲコゲち相談する暇もねえ 指定ん日に決められた場所に集合。残された子供抱えち それも乳飲み児ん顔みりゃもう 無事帰るんならいいが。

えーと麦刈りも遅うなった 田植えも済むこた一済んだがこれかるんイノチキか 気になり苦にもなる。時時ん加勢かあっちチッタ助かるが それにゃソレナリン気を使う。言い寄っちクルシモある。出征兵士ん家ち解ちよつてん そこゝ別ん魂胆じゃつちあるわな。それが人生かとん割り切る。

撥ね除けちガムシャラに働く ダリが重なっち乳ん出が悪い。ゆうソバユル話しゅう聞いた そげな物語たゝトンデンネエ 厳しい 世間の目は時としち牙さえ剥いち 襲いかかちくる現実。『姉やん何とかしちくんゝ』 最後ん手段に姉に救助を頼んじ 忙しいな解ちよつてん もう身がもたんごたる。

でん助くる神仏じゃつちある。日頃ゝ仲が悪かったけどハズミジふうゆう面倒見ちくれ 時時相談相手チなच्चくるるき どんくれ嬉しゅうじ助かるか。『いつも済まんえ！ 枯れそうな 涙絞っち頭う床に擦れつけた。『そげんこつしなんな女ご同志 どげあってん婿じょうが帰るまじゃ 絶対言うこつ聞くこたならんで！

くり返す苦難がもう限界にまじ そげな時でん物はノウでん 助け合うち食いつなぐ。腹ん児も生まれたが 後ん仕事もとてんマメーナラン。イアンバイに区長さんが 噂う聞きつけちそれとのう 見守っちくれたき何とか 子育ては無事ユウシタモンジ 親はおらんでんチャント 児は育っち周りんしたちん 真心が通じたんか病気もせん。

ソウコウシヨッタラ 『戦争に負けたゴタルき』 触れが回っち来た朝慌てた拍子に 出征するゴツなちよつたしが 区長かて 飛びくうじ来た。『行かんでんいいんじゃろう』 『もうイイワイ ジャケンド役場まじ行け』 区長も忙しいにいろいろコタエン。

とにかく行くこたゝネーキちなった。気合いが抜けたしやら ほっとしたしヤラ。あげ一苦勞したに負けた こん後はどげ一なんの。マアフントいろいろ流言卑語が飛び寄った。『男はみんな連れち行カルルごたると』 震い上がるシモおったがそれもどうやらデマじゃった。

『進駐軍が来ち若い娘は連れち行く』 こげな噂話しもあったが事無きに終わった。大分に進駐した軍が野津原にゃ すぐ来るち役場は書類を ヤッコサイダらしいが それもどうやら無しじゃった。苦しかった辛かった戦争 そんな銃後じ守り支えた女老人子供たちん 信じられん苦勞は 後ん祭りじゃなんとん やり切れん悔しさが残った。

女ん底力が見事に咲かせた根性 助けあい支えあいしながら 言い知れん苦痛にも恥じにも 立ち向うた執念な見事に守り 貫いたんでんあった。無事に帰った夫とん再会ン反面無言の凱旋の悲喜こもごも。あげ一頑張った女ん底力でん どうにもならんナサケネー現実。残ったが悔しいやら。

●●● 母の作った弁当の味 ●●●

贅沢う言うてん口モガイしてん 母親ん手づくりん弁当にゃ
ヤッパ心がこもっちゃう。弁当箱を開けち ホカン人たちのと
横目じ比ぶる。『やっぱ俺がんほうが ケックシャイイ』ち
気をゆうしち食いよると 隣りんともだちが言わんこた ねえ
『お前かたん母じょうは うまいのう』

もうデーブン前ん話しじゃが 朝起けたら母親は寝ちよる。
『オカチャン悪いんな』『うんチット熱があるごたる』 弁当
はどけなつたんかち 不安になつたが病氣とキチャ 聞くのん
遠慮したところが 母ん声。『今日はニギリ飯でん イイジャ
ロウ シンボウシナァ 作っちあるき ママたべたら包んじ
持っちいきよえ』

なんと熱があつたに ヨダキカッタロウニ ちゃんと弁当は
『ニギリ飯ジャケンド ツクッチ』 くれちよつた。ぼろっと
涙が出たけんど 男っ子じゃソリャ言わんじやつた。

雨降りん朝じやつた 草きりかる帰りヨセン 忙しゅ動きよ
るき 何しよるんかち見ると 『きな粉うつけたオハギ』ウ
弁当に入れよる。なしかち思うち見ちよると 『今日は誕生日
じやつたな』 さらりと言うちニコット笑う。出かけにシコし
ちやつたんじゃろう。母親はなしあげー出来るんじゃろう。

たしか弁当忘れた日のこつう ヒョイト思いで一ち話すと
『そげんことアツタナ』 アワテチツージ来ちくれた。小使ん
オイサンガ たまがっち誰か悪いかち思うた。『忘れぼうじ困
るんで』 きまり悪そうに帰る後ろ姿に 小使さんも感心した
ち 渡しちくれた。なんか弁当がポカポカしちよる 伝わっち
くるそん温もり 今でん思い出えち『すまん』ち 思うが口に
ゃ出さんけんどが。

子どもを生みソソグ始どを世話 育つる母性本能たあどこ
かる 出るんじゃろうか。弁当にゃ作る人ん心が 気持ち
が込められちこす食べち 『ああ美味しかった』ち 口か
る思わん自然に出るもんでんある。ごく当たり前ん事が誰
にでん 出来そうじ出来んジャキ『おふくろん味』ち 言
うんじゃろう。

子どもが県外ん学校じ自炊 アルバイト生活じゃき親に
しち見りゃ 気にもなるんが当たり前。『どけーしょん
かチョイト行っちくう』 日ごろァつけんクリームつけ
久しぶりん洋服着こんじ。『けつくしゃゆう かたずけち
ゃらまゝフント』 ホホヲ濡らす一筋母なればこす。咄嗟
に 『あん子が好きなステーキでん！』

大きなもんなやっぱ高え 2枚を1枚にしちチット大き
なもんにした。半分ずつ……そげなミミチイコター母ん
本能がムラムラと起こる。『私はいいわ あん子に！』ち
帰って来た元気な顔に もう何も食べんでんいい……母親
根性が頭もちあげた。

『久しぶりじゃろうき ステーキ焼いたで！』『おおきに
ほんな 半分ずつ食べようえ』『うっとうはいいき 食べ
なゝ バイトはヒズネエナ』『大丈夫 皆んな元気い！』
サラサラと話すのん 男ん子じゃきか。美味しそうに食ぶ
るのを見ると ちった食べて一気持ちにもなるが。

『昼はどけしょんの！』『おかんがん弁当はねーきなゝ！』
『いつまでん甘えラレメーキなゝ！』『……………』『元気し
ちよらにゃなゝ 食ふんな辛抱せんでん 食べよえ』『う
ん 明日弁当作って！』『え 弁当！』『うん食べとうなった
き』『ありがとう 嬉しい』 浮き彫りん子の顔が…

日向周辺ん賊々征伐しちん帰路 障子岳ん台地じ一夜を明かした 朝ん眺望んなんと素晴らしい事か。朝日に照り輝いちょる野津原 まさに桃源郷とでん言いたいごたる。『なんところん里は恵まれちょるんじゃろう！ 朝げんタナビーチョル煙りにゃ そん影じ笑い声やら弾む動き。

帯っ引いたごつ流れ曲がった川 そん源にゃコンコンと清水が 絶え間のう湧いちょるじゃろう。朝日にキラキラ光るそん マブシイノン笑顔にゆう調和しちよる。『ここは何と言う里か！ 供の者に尋ねると 『豊後ん国ん奥座敷でしょうか！ 『さもあらんのか！ きっとそげな会話があったんじゃ あるめーか。

今でん宇曾山んの 頂きかる見る七瀬ん里は 緑ん森と七瀬川ん せせらぎん音が 鈴々鳴らすごつ聞こえそう。

朝のささやかな食が済むと 暫く見惚れる様に『なんと平和な 今度の任務ん中でん思いで残る そげな思いがしてならない。どうだろうか この土地の民の幸せな平和念じて ここに祠を造り矛を納めて 行く末を念じたいが！ 『それは大変よい情愛と存じます 早速あり合わせの物で工面を』 と供の人たちも丹精込めて造り 矛を納めたち言う。

近傍で一番高い御座岳に祠を そしち矛を納めたが 後になっち障子岳に移し さらに宇曾山の祠に移したち言う。今もそん太刀は『宇曾岳神社』に 祀られち願いが生かされちよる。あれかる何千年も過ぎたが 願い思いは今の地域の そして人ん心ん中へ受け継がれちよるんじゃろう。人の心に残る不思議な 巡り合わせは時としち こげな物語りにもなっちよる。

子どもん虫封じ、子宝明神、火伏せん神、水神安産の神、更年期厄よけの神、交通安全守護の神、などなど 宇曾岳神社は 野津原を代表する東ん顔。みどりん森と美しいせせらぎに 育まれて幾百年幾先年もん歴史を 今も受け継いじ 皆んなの幸せを念じつつ 今日も夜明けを迎えたんで。

★ №2…『義経っ迎える予定じゃった！』

壇の浦ん戦いじ（1185）平氏を 追撃しち来た義経は 奮戦しち 平氏を破ったけんど あんまり見事な戦勝に 兄頼朝とん対立によっち 身の危険を感じち九州に逃避の道。豊後竹田ん岡城に迎ゆるこちなり 途中ん愛宕城に立ち寄る計画じゃった。

なにしてんムゲネエノウ。とにかく一時でんゆっくり『ヨコワセニャ』ち 忙しゅ準備したごたる。とにかくここまじ来りゃもう心配ねえわな。『さぁシコ出来たで』 今や遅しち待つちよつる事ひさし。こげなこた一知らん間に 頼朝ん策略じ追われるこちなり 九州にゃ渡るこたぁ出来んじゃったき 皆んなもガッカリしたが あれだけ武勲も立てたに 兄弟じ憎しみあうんも 気の毒なことであつた。もしで 愛宕に迎えちよりゃ歴史も ヒ●ヨイトスリャ 大けん変貌がその後んにゃあつたんじゃ あるめ一かなえ。



歴史たぁまぁこげな悲喜こもごもん 問題が 残されち血肉分けた兄弟でん ムゲネエ理屈ん結末にもなっちよる。権現村ん華やかん頃い続いち 一躍有名になったかん知れん。これも巡り合わせんワヤクか 口水ん垂るるごたる話でんあつたに。今頃はどげな代わりようしたか 夢ん見そこないはセチナギーコト。そげえ思いませすかえ。

玉手箱



★ No.3…清正公の遺徳 ★

加藤清正公ん親子領地んと 細川領地になつた肥後領も
時ん流れじ 本当は細川流政治にしたかつた。じゃがあまり
にも清正ん遺徳が大きかつた。約25年はずんナカメ 領民
とん絆は強固になつち いかにか飛び地ん事もあつたが 生活
環境が都市に負けんくれ 改善され発展した証でんあろう。

そげな根強い遺徳はヤンガチ 旨い具合に利用したんが得
ち それかるは大事に取り扱う そこに治安も産業発展も
効果をもたらしたごたる。そん1つに『清正公堂』も 建設
さ差し止めちよつたが それも解かれち領民とん 和合もス
ンナリ行くごつなつた。

明治に入つち野津原神社ん創建じ 『清正公分霊』もこん
お宮に勧請になつち 今も夏祭りにゃ『清正公まつり』ち
賑やこう御輿じ願幸もある。『清正公堂』んある法護寺ん
石垣も肥後方式ん気品があつち 夏祭りん石垣上に並ぶる
カンチャロは江戸期ん 参勤交代時代の送り迎えん 名残り
ん灯でんある。そつと残した寺僧の心意気が 仄かに残る今
遺徳が忍ばるる。

加藤清正公ん参観交替（正式にはこう呼ぶそうな） ん時
も野津原じ供揃えしち 威風堂々2の瀬かる⇒7つん瀬を
光吉まじ出ち鶴崎に向こつた。1の瀬はチット手前にある。

唄〇二の瀬三の瀬無事瀬を渡りあた一デーラじ見送られ…

ハ 七瀬ん せせらぎ サラ サラ サラ サラ ホイ
ホイ ホイ〇唄

途中んワベトにゃ 道中安全の祈願塔
もあつち 旅ん無事う願う気持ちが こめられちよる。

★ №4…『浅内長者がおツタそうな』★

浅内に長者がおツチ山ん守りかる 周りんしたちん生活まじ
ゆう 取りしきりよったし 情けを乞うち戸を叩くしにゃ 戸
も開けち仕事に困るしにも そんな助けをシヨツタキ そんな長者
も何代もつづきよった。じゃが世の中は ソウシタモンデンネ
エモン。困ったこちいもなっちしもった。

子どもが絶えち老いん身にも 案ずるような事も出来でえた
。皆んなに相談しちみると 『どうか後継ぎう捜しちオツチほ
しい声。やんがちしよると 山ん向こうかる養子を迎ゆるこち
決まった。近所ん優しい娘にも勧たら いいち言うこちなった
。お願いが叶い老いん親たちも 何よりもヨロクウダ。

これもこん世じ自分が人に施した そんな報いがあつたかるこ
すち とてん喜くうじ皆んなかるも 祝福さるる幸せな老後
になった。出来る時にする善意は口にゃ 簡単じゃけんどさて
実行ちなりゃやっぱ勇気も 決断もいるごたるもん。情けにす
がった人ん知恵じ田んぼん 開拓に耳う傾けた事も 野津原1
旨い米が取れたのん《当時》 話に残つたのん領ける。

谷あいん水うボランゴツ纏めち 水路に引きこみ屋敷ん側ま
じ 連れのうち来たもんじゃき デェラを開墾しち見事な水田
になった。そんな頃6反あつた《60アール》ち言う。こげな山
奥に6反も広い田がある。やっぱ施しに報われた 長者さんの
人徳じゃろうな。神仏ん加護もあつたじゃろう。

こん田が出来たお影じそんな下ん 谷にも引きこんじゃ田が
チットンズツ出来た。狭うでん田にゃ変わらん 手間がかかっ
てん米が取るりゃもう 何よりん豊かん暮らしも出来る。長者
ん元でん気心を合わせた人たちが 手間賃も貰える幸せ人生。

浅内長者がおつたきこす。

★ №5 …『能登かぐら』

野津原に京都かる神官 神楽師なんかと寛永2年(1625)に 共に入っち来た能登神楽は 京んみやび優雅さを保つ 舞いでんあり『大神』なんか8つん 舞いを奉納されよった。大神にゃ神楽唄があっちコリャ 口うつしじ伝承されちよつたが 途中じゃ若い人たちん不足やら 世話をスルシたちん関係じ 絶えちしもった。

誠ちオシナギー話しでんあつたが そんごく一部は最近になつち 古老ん聞き伝え何かを元に 繊細な若い人たちが復活 舞いを戻して来たが 九州んほかの舞に比べち 勇壮さとはチット違う真髓は 理解しにき一面もアルゴタル。4人舞いをこん前ん町ん『ふるさと祭り』ん 前夜祭りじ奉納懐かしい 優雅さを堪能することが出来た。

大和かる入っち400年あまり そんリズムに先人たちん 願う思いをドゲナふうに見 聞いたんじゃろうか。入蔵に入ちきただけに 地元鎮座する『宇曾岳神社』にも 結びつきもあるじゃろうき これかるん取り組みも待たるる。熱心な人たちん取組がある時が 潮時じゃき何とか継承願ひテェモンジャガナ。

源氏ん主護神ぬ護っち この地に腰を据えた話しを聞くと 巡り合わせた宿命は常に存在するもん。円福寺信仰かるやがて 山ん頂きに奥の院が形成さるる。それに連れなうごたる『能登神楽ん舞い』は 京都から来たと言うロマンも 現世ん仄かな夢物語りにしてん 事実記録が残されちよりゃ これも近代生活ん中に美しい 開花した京ん香りも漂うもん。

アッチ欲しい欲望が燃える時 そん優雅な舞に合わせた『神楽』ん響きは ほのぼのと写し出されそう。



★ № 6 …『バクチ穴ん人情』 ★

昔しゃ鬼が住んじょつたち言う 大けなほら穴じゃき 人ん行くぬう止めちよつた。谷窪んほら穴にゃ 松明ん明かりい映し出されち バクチがはじまった。近くん年寄りしが集まっち そりゃもう諸肌ニイジン大会場。逞しい男たちん勝負そりゃ勇ましかった事じゃろう。

まさに勇猛果敢な勝負 そりゃ間違いねえ事じゃつたが ただそげな遊びだけじゃねえ 人ん面倒見もいいし 多くん人たん信頼んある顔役としてん 地域ん世話もゆうショツタそうな。それだけ学もあり財もあっち 無値観のあるシタヅん いわば集合娯楽場じゃつたんか。

じゃがソゲンコツツ表に出えたんじゃ いろいろ問題もあるき 仮ん名前じ隠れみのに したんかん知れん。とにかく鬼がおったな間違いなかるうき そりゃもう素人にゃオズカッタ。昼間でんアッコソングにゃ 『薪もん取りでんアッキにゃ行くなや』 ねんじゅう言われよつた。こりゃあ今市ん話じゃが…

野津原にもこれにユウニタ話しがあつた。夜中えションベンに起きち あん方向をみるとメーバン 火がトボレチヨル。目をムイチミヨち 怒らるるけんどヤッパ見ゆる。年寄りしゃ知っちょつてん 知らんふりゅうしよるごたる。山仕事に行つた時じゃつた。こげな話しゅう聞いたんじゃつた。

『どうでん困るごたりゃ コイサあっき頼み行け！ どうやらバクチ穴に行き銭う借れち 言いよるごたる。なしでん本当そうな話じゃ どうやらこげんことらしい。毎晩バクチ勝負があるが そりゃまゝアクマデンお遊びん話。大けな銭が動くが金持ち年寄りんお遊び。金借りん場所でんあつたごたる。

★ No 7…『頼母子講』

昔かる金貸しがおったなあ チョイト金に困った時ん間にあ
うき ソリヤマァ便利もよかったし 助かる事も多かったじゃ
ろう。が所りヨルト思わん高え利子 そりい払いキランごつな
っち 挙句んはてにゃ夜逃げちなる。気の毒でんあるが借る時
う思うと 絶対に返さにゃならんな 世の仕組みでんある。

気の合う人たちじ助け合う そげな決まりじ始めたんが『頼
母子講』 字にもゆう出ちよるごつ 頼り合う事じそん場が
凌ぐりゃオンノ字でんある。毎月決まった日に集まっち 掛銭
う集めち当たりくじう決むる。そん時い早めに当たったしゃ
そん分の利子う入るるき こんだ当たったしゃそん利子まじ
貰うこちなる。が利子以外は利子う払う 金ん前取りでんある
。

『今日はどうでんほしいケンド』 前もっち解っちよりゃ
そん旨言うちゃきょ便宜う しちもくるるが 希望が多いとこ
れまた当たりくじん 抽選になる。ヒョイト欲しいしゃなかつ
た時あ 遠慮のう借っち次ん月かる 利子う付けち掛くるき
早う使ゃ利子を払うき 計算すりゃ大けな損じゃが そん分な
早う役たっちくれた。

一番しまいに貰うとなりゃ 待ち遠いけんど早う使うちしん
利子う皆もらうきケックシャ いい利回りにもなるごたる。
お互いにヒジイ時い役立つなあ どんくれ助かるか あんバク
チ穴ん財産持ちに頭下げち 借るよりも気分的にゃいいかな。
思わん役立つ銭があるんも 日頃かる準備するぐれん 才覚も
心がけもなかりゃなるめえ。

困っちよるしが歳ん暮
れに『なんとか貸してほしいが！』 よくよくん話。



『解った じ いつ返すんな』『来年の暮れにゃきつと返しますき』『そうな ほんなよかろう』 気安く借しちくれたき ほとしち 夜道う 帰った。借る時に返す時んこつう ちゃんと考える。そこに人間の信頼も生まれちくる。『よろこべ借しちくれたど』 家族が喜んだが 本当に返せるか。これからが 正念場でんある。

やんがち夏が来た それも暑いさかりん年。借しちくれたしが そんな家ん横を通った時ん事。洗った足中が干しちやる。顔が目に浮かんだごたる 『やっぱ気構えが違うのう』 嬉しそうに小走りに帰った。そげんこたゝ知らんき 晩方になると干した足中ゝ シマイクウダ。

提灯ぬさげちこんだ晩に見に来たら ちゃんと収しちやる。『ふうん感心じゃのう』 嬉しゅうなったき提灯ぬ消すと 『すまんが提灯が消えたもんじゃき ローソクがありゃ一本借りて一んじゃが』『あら 暮れには大変ありがとございました あいにく新しいなゝ ねえけんど使いかけでん よかりゃ使っちゃください』『それじゃあんた方が 困るじゃろう』

『いんげ 内はコイサは辛抱するき どうど』『いいんですか』『どうど 帰りが困るじゃろうき』『そりゃ一済まんなゝ』 遠慮すると悪いから 『じゃ遠慮のう』 使いかけん ローソク受け取った。明かりう点けると なんと赤く暖かい事か。まるで人間の温もりが伝わるごたる。『ほんな借りるき』

見送った夫婦は『よかったのう 使いかけでん役たっち』 いつまでんそんな 明かりが解らんこつなるまじ 見送った。もしこん時なかったら 又新しいんがあったんなら 答えは幾つも考えらるるが きつと夜中に何があつてん 取り合えずお互いに 役立つ方法があつたかりゃこす よかったんかん。

※※※ 方言説明……女性の底力……※※※

71⇒しもった…しまった。ウチマジエ…私までも。ドマ…そんな事を。ねえわなち…ないですよと。グレドコロカ…貫うどころか。お前かた…あなたの家は。ハカドル…進んで。アゲコゲチ…あれこれと。えーと…やっど。イノチキ…生活。ダリ…疲れ。ゆうソバユル…よく乳が漏れる。でん…でも。ハズミジ…いいことに。

72⇒ノウデン…なくても。マメナラン…思うにならぬ。イアンバイニ…都合よく。ユウシタモン…よく出来たもの。ソウコウシヨッタ…そうしている間に。ゴタルキ…ようで。イワイ…よいから。ジャケンド…ですが。ネーキ…ないから。マアフント…おもわず。シモ…人も。ヤッコサイダ…焼いてしまう。ナサケネエ…情けないこと。

73⇒口モガイ…反抗。ヤッパ…やはり。ほかん…よその。ケックシャ…結構。デーブンだいぶ。ママ…飯。ヨダキカッタロー…大義じゃろう。ソリャ…それは。ヨセン…すぐに。シコ…準備。ツージ…飛んで。

74⇒ソン…その。ジャキ…ですから。どげーしよんのか…ドウシテイルノカ。チット…少し。うっとろ…私。ひずねえな…辛くないか。ラレメーキ…られないので。

※※※ 方言説明…玉手箱……※※※

75⇒そしち…そして。ちよる…されてる。

76⇒けんど…けれど。ムゲネエ…かわいそう。ヨコワセニャ…休ませないと。ヒョイトスリャ…もしかしたら。ワヤク…いたずら。セチナギー…悔しくて悲しい。

77⇒ナカメ…仲間に。そげな…そんな。ヤンガチ…やがて。ごたる…ようで。カンチョロ…石油を使う灯明。2の瀬…2番目の瀬渡り場所。チット…少し。ワベト…地名。

- 78 ⇒ オッチ…居て。シヨッタ…していた。ヤンガチ…やがて。
ソシタモンデンネェ…旨く行かないもので。やんがち…や
がて。いいち…よいと。ヨロクウダ…喜んだ。ボランゴツ
漏れないように。デーラ…平らな。チットンズツ…少しず
つ。
- 79 ⇒ コリャ…これは。スルシ…する人。オシナギー…借しい事
で。アルゴタル…あるようで。ドゲナ…どんな。デーモン
ジャガ…したいものだが。アッチ…あって。
- 80 ⇒ ニンジ…脱いで。シヨッタ…していた。シタシン…した人
の。じゃが…ですが。ソゲンコツ…そんな事を。オズカッ
タ…怖かった。アッコソングニャ…あそこあたりには。ア
ッキ…あそこ。ユーニタ…よく似た。メーバン…毎晩。ト
ボシチョル…灯している。ムイチミヨ…開いて見よ。ヤッ
パ…やはり。コイサ…今晚。
- 81 ⇒ ソヤマァ…それなら。キラン…出来ない。ケンド…けれど
。しちもくるる…してもくれる。ヒョイト…もしかして。
ケックシャ…結構。ヒデイ…辛い。やんがち…やがて。足
中…農作業用の足の前半分の短い草履。
- 82 ⇒ シマイクウダ…なおしてしまった、取り込んでしまう。い
んげ…いいえ。

★ ローソクの使いかけを貸す こんなに辛抱している証であ
り 物を大切に使う手本。親切なら新しいのを貸すのが
情でもあるが咄嗟の時の 準備は家庭を優先する。しかし
相手によりけりで この場合『使いかけ』を貸す…差し上
げる事になる(消耗品だから)。相手に気を遣わせない心
くばりでもある。新しいのをもしだしたら 『こんな贅沢
が出来たら』と 不審を買うことにもなりかねない。
バクチ穴じ借りる場合と 信頼で借りる場合とでは 両者
の立場でかなりの開きがあり 時の采配は人情が込められ
ても いるようにも受け取れる。

風話伝承

世の中にゃ力持ちも オルモンジ尾原ん『伊三郎』も そんな一人。馬屋ん肥う出すに 坂道う上る時い荷が多いと 前が見えんもんじゃき考えた。ハリコイツパイ荷を後ろにシチ 前にゃ大けな石うブラサゲタ。『コレジ前がゆう見えでえた』もんじゃき運ぶに 苦がのうなった。

そんな石ん重さがなんと 36貫(約120キロ)も あったち言うき ソンシガどんくれえ力持ちじゃつたか 大方解るじゃろう。そんな石は今でん 尾原にあるそうな。昔ん道もそげえユウナカッタじゃろうき 苦勞が目に浮かぶけんど そりしてんまゝ力ん強いこちなえ。

『秋葉山の力持ち』

秋葉山んそべ力持ちがおっち 近所んしに勧められち 俵運びゅするこちなった。それぞれが米俵う 1俵ずつ担いじ距離う測った。そりゅう見ちよつた力持ちが 皆んなかる勧められちスルコチなった。やおら立ち上がっち そんなしは『ハマ下駄う』履くと 1俵ずつ前と後ろにサシに 担いじ秋葉山に向こうち 歩き始めた。

タマガッタタチが 見ちよつたらサツサと 石段め上りはじめた。『ありゅ見よ』ち 皆んながタマガッチ見ると こんだ上り詰めたところじ 裏側に回っちそんなまま 下りはじめた。見とれち声もでらんごつ タマガッチョルニ 皆んな前まじくると そんなしは俵もオロサンママ 『モイッペン上っちくう』そげえ言うたもんじゃきもう 二度びっくり。参った参った えーとそんなしも 俵をそき下したんと。

『力持ちん一華和尚』

自分かたん寺ん屋根ん 葺き替えに大ごん竹がいる。信徒んお百姓さんに『無理なお願いじゃが 竹一荷ほず』ち 頼むと心よう貰えるこちいになった。そん話んイットキ先んこと 『どんくれ切ったんじゃろう 遠慮したんじゃあるめ一か』 そげな思ひじ竹山にはいと な なんとまゝそこらじゅうん 竹が見事切り払われちよつた。

ほかんしに話すと そんしが又ついでん時 『こげこげじゃつたんかえ』ち 和尚に聞いち見た。『それで遠慮のうち 言うちくれたき 何べんも行くなゝヤエコチャネエキ』 多荷じ一荷にクビッチ 『貰ち帰ったんで』『じゃつたんな そりしてんまゝなんと力持ちじゃな』

あんまりん出来事にそん 評判がひろがっち 『一華和尚』ち言うごつなつたそうな。欲張りでんねえき 『あげるで』ち言うた 百姓しもそっじゃが 貰ろうた和尚も 折角そげまじ気を効かせち くれたんじゃき遠慮してん 失礼ち思うたんじゃろう。『遠慮ヒモジイ伊達サミィ』ち 諺もあるがまさに そん通りでんありそう。

一華和尚が殿様ん参勤交代行列じ 苦役に出るこちなつたが 僧侶まじ使うたゝ役人の 心くばりがおかしいち 途中休憩ん時 駕籠先っ片一方担ぎ 反対ん方は崖先につきでち たばこ一服 駕籠ん殿様チット涼しいき ヒョイト見たら何と『ホキンサキ』 肝冷やしたもんじ 供の者に聞いたらなんと 苦役の役割が気づかい不足。

何でん杓子定規じゃ世の中 旨く行かんもん。臨機応変でくる裁量も時にゃ役立つもん。何でん能力有効に生かしちこす そん成果も素晴らしいもんになちくるるもんでんある。

『99谷を造った鬼』

食べもんが欲しいもんじゃき 人間と約束した鬼は 99谷を夜明けまじい造るこちかけち 懸命に夜通し造った。雨んたんび大水が出ち道うふさぐ そんな難儀うヨクルタミ 思いちいた方法でんあった。そりい鬼も一番欲しかった 食べ物う貰えるとアッチャ 調子ゆう話しに乗ってん シュワネエち思うた訳。

夜が薄らシラミカケタ頃にゃ 98ん谷が何とか出来ちよつたき アタテ仕上げすりゃもう 出来上がりになる。そりゅう見た百姓んシタチハもう タマガッチしもうた。『とてん出来めえ』ち思いよつたに こげ早う出来たとあっちゃ 嬉しい反面食べ物う鬼に やるサンダンナ出来ちよるんか。

古老たちもちっと慌てち 『どげしたもんか』ち 顔突き合わせち策う練った。『出来あがりゃ 食べ物んの約束は 守らにゃならん』『食べ物はどけすんのう』『……』 と そんな時じゃった。『ぼっちよる笠』を持ち来たしが 『しよわねえき 鶏ん鳴き声うサセチ ハヤオキさすりゃもう お終いじゃ。

もうすぐ夜がアクルゴタル 鬼もいよいよ最後んフンバリち休憩もやめち立ち上がった。そんな時じゃった 上ん方ん積み上げた 大けな岩がユルウダンカ ゴロ ゴロ と勢いを増しち転がりだすと 勢いを増した岩に叩かれた 他の石がまた一緒に動き どんどん転がりて一た。ソシチ又1つも転がる。

『どうした事か あん岩が転がるなんか 考えちよらんじゃつたに なしか どしたんか……鬼は慌ててそんな岩を 押し止めようとしたらカエッチ悪かった。そんな岩にセラレテ鬼自身が 足う滑らせちしもうた。『シモウタ コゲナはずじゃなかつたに フントモウ』 もうそんな時遅かった 谷が次々に壊れちいく。

鬼はもう慌てマクッタけんど 『こりゃもうとてん ツマランコチなつた』 痛んだ足うナサケナソウニ見ち 『やっぱ俺ん考えは間違いじゃつた』 頭お寂しそうに転げ落ちた岩に擦りつくると そんな時じゃつた。すぐ遠くもねえ所かる 朝ん一番鶏ん鳴き声が バッチョロン羽音に混じっち 聞こえちきた。

『コケコーロ 夜があけたど コケコーロ』 『もう負けた』 鬼はそれでん 約束した99ん谷 を仕アグルと 古老に言うた。『恥も外聞もねえ 私の負けじゃ が約束した99ん谷にも1つ つけち皆んなにあげよう』 そう言うとなん痛みもソッチノケ 一生懸命頑張っち 昼マエにゃ全部仕上がった。

そげな話しゅう聞きつけた 百姓したちも加勢しち 見事に100ん谷が出来あがったごたる。古老は鬼ん側に寄ると 手をシャントにぎり 『とにかく足ん傷ん 手当てシュウエ』 『いゃもう こりゃいい 私がしますき 心配イランダ。こん谷は私ん考えん間違いに 天罰う受けたんじゃろう。

『こん谷じこれから 皆んな幸せんイノチキン 暮らしも出来るじゃろう 私もこれじ心残りのう 旅に出ます。皆んなに迷惑かけたセメデモンお詫びに』ち 決意したようジャツタ。古老は『私たちも嘘ん鶏泣かせたり』ち 本当んこつち打ち明けち 一緒に暮らそうと勧めたが 鬼は自分の過去ん行いを悔い ついによその国に出て行ってしまった。

悔い改めるに憚るコターネエに デン心に決めたんも ここが真剣好きジャツタからかん。修行しち見違ゆるごつなって 帰っち来るこつ願って待つんも 優しい心くばりかん知れん。今も山際かる胡麻鶴に残る 小さな谷に少しづつ染み出る水は きっとそんな時ん鬼が造った谷かる 伝わる水んゴタルワナ。

『戦国武将に関わる供養塔か！』

片草地区の前面南ん小高え丘に 7基ん塔が眠つちよる。地元人たちん話によりゃ、文字が周りに刻まれち 『右大神』なんかん文字が読まる。戦国武将に関わちよつた 供養塔かん知れんが 大事に埋葬されちよるぬ見 思い合わすんにゃ 古い大事なもんち感じらるる。

そん更に上段奥にも 丸い塔ん部分がガイトあっち 語り伝ゆる話いよりゃ 『娘を朱漬けにしち葬ちある』ち 聞かしちくれた。古い昔かるん技法じページしちやる そげな事かる推測すりゃ よっぱず高貴ん姫じあつち 仄かな姿も想像もさるる。若くしちこん地じあえなくも 世を去るんが忍べれた。

歴史を振り返ち見ると 平安末期に栄えた藤原頼長が かつては九州かる北は陸奥まじ 19ヶ国う持つちよつた。植田荘もそん中えあつた《今市、石合を除く野津原》。そん頼長も保元の乱じ敗死。諸領地はすべて皇室領に なつちしもつた。1158年頃ん事じやつた。平家ん左大臣じやつたようでんある。

こげな歴史ん中かる浮き彫りさるんが 今市にそつと残ちよる『供養塔』。そこじこん頃ん野津原ん状況じやつたが 大神系ん話しが入ちくる。1100年代にチョイト バックしち見ろう。

大神季定が1058年頃に 浅内に進出しち『長者屋敷』う構ゆるが それにゃこげな説もある。もともとかるここに居つた『長者』に 子供がなかつたもんじゃき 大野かる山い入れたんが 季定じやつたとか。地域起こしに熱心じ 開発領主ち言うはず地元ん 人たちん希望取り入れ 整備に取り組んだそうな。

野津原一番早う開拓事業やら 水田6反開墾(60アール)野津原一旨い米が出来ち言う。

大神3代人助綱ん頃ん 保元の乱にゃ源氏に味方 平家討滅に活躍したと言うき 敗退した藤原一族はトニカク 避難の憂き目に追いこまれた。植田荘に関わらん上石合に 助け求めち落人になったんか。詳しい史実は残しとうねえ そんな気持ちもゆう解る。

昔ん人里はなれち隠れ住むにゃ チョウズよかったんか 源氏に破れた平家ゆかりん 者たちがアッチコッチ身を寄せ隠し お姫様も追っ手を逃れち ここまじ着たんじゃろう。辿りちーち ヤンガチ心労もあつたじゃろう。亡うなった時 そんな全身ぬ『朱漬けにしち石棺』じ 埋葬したち言う。

墓地ん手前は地区の人たちん墓所。そんなと奥にあるんが そんな伝説ん墓ち言う。字はもう判らんけど 墓を棒じつつくとコツコツ音がする。石棺らしいものに当たるち 言うのん『そげーあっちほしい』 人情も込められちよる。そりー墓石も東向きに建つき 普通たゝやっぱ違ふごたる。

盆の墓掃除は普通は6日じゃに。これは7日にするし墓参も 普通は13日じゃにここゝ14日。それに盆の灯もトボサンとか。やっぱ隠れ人ん墓じゃろう。それだけ地域んしに 気を使い申しわけねえち 常に想いながらもせめて 安住ん身の上に感謝しちよるんじゃろう。

こそっと東向いち故郷しのび 墓地にもほかん人たちに 遠慮しち盆の間も静かに 心じ念じる様は誠イタワシイ。心ある人たちは自分の先祖に 手向ける時に同じ想いの人たちん 代わりに香をたむけるち言う。切ない戦国の物語が幻想的に 浮き彫りさるるような 悲しくもある伝承物語。今日も木木をゆする風に 鳴る自然界の音が もの悲しく響くのも 人の世の宿命でんあろう。

- 86 P…オルモンジ…いますから。もんじゃき…ものですから。ハリコいっばい…最大限の。コレジ…これで。じゃき…ですから。ソンシガ…その人が。ユウナカッタ…悪かった。そりしてん…それにしても。そべ…働。スルコチ…しますから。ハマ下駄…ハマがついている下駄。サシ…前後に天秤で。タマガッタ…びっくりした。したんと…したようです。
- 87 P…一荷ほず…両方に天秤で担ぐ量。どんくれ…どのくらい。あるめ一か…あるでしょう。そこらじゅう…周辺に。クビッチ…束にして。そりしてん…それにしても。あげるじ…差し上げます。ヒモジー…空腹。サミー…冷えこみ。つきで一ち…つきだして。ホキンサキ…崖っぷち。なっちくるるもん…旨く行くもの。
- 88 P…たんび…度々。ヨクルタミ…よけるために。ショワネエ…大丈夫。シラミかけた…夜が明けかけた。サンダンナ…大変な。どげ…どう。ぼっちょろがさ…竹の皮を利用して造った雨よけ笠。ユルウダンカ…緩くなったのか。ソシチ…そして。なしか…なでか。どしたんな…どうしたのですか。セラレチ…押されて。シモウタ…しまった。コゲナ…こんな。フントモウ…本当に残念。
- 89 P…慌てまくっち…慌ててしまって。ツマランコチ…何でもないことに。ナサケネエ…情けなくて。シャント…しっかりと。シュウエ…しましょう。イランデ…無用です。ジャツタ…でした。コタネエ…事はないから。ゴタルワナ…そのようです。
- 90 P…ちよる…ています。なんかん…なにかの。されちよるめ…されているのを。ガイト…たくさん。しちくれた…してくれた。デージ…大事に。しちやる…している。そげな…そんな。よっばず…よほどの。あえなくも…おしくも。なっちしもうた…なってしまった。さるんか…され

るのか。そこじ…そこで。チョイト…ほんの少し。
それじゃコゲナ…それには こんな。かる…から。
もんじゃき…ものですから。

91 P…チョウズ…都合よく。アッチコッチ…あちらやこちらと。ちーち…着いて。ヤンガチ…やがて。けんども…けれども。つつくと…軽くたたいて。そげえあっち…そんなにあるのに。トボサン…灯さない。ちよるんじゃろう…そのような事になるのでしょうか。イタマシイ…気の毒なかわいそうで。

★ 91 Pにある⇒植田と名前がありますが 当時はこれが通称のようで 現在の『ノギヘン』がつく 植田と同じ地域のように。歴史には隠さねばならぬ 理由があつての現在まで 伏せられたのかも知れません。常に世の裏表があり 強い勢力の時代はその分は 表に弱い力は裏面だと それは現在にも共通しそう。

そっとしてこそ人情と思いますが 方言集の生活上敵えて 『民話、伝承』に取り上げて その霊を慰めてあげるのも 人情だと思います。史実の確証はないので 伝承として紙面に紹介いたしました。古老からの聞き取り 歴史のバックなどを重ね 仄かな伝承としたものです。



野津原方言單語
ふりがし



か…カトカセ…肩を貸して、重荷ですから加勢して、肩を入れ。
カドヨキヤ…寄らずに行く、避けて通る、皮肉な行動。
カトーイケ…きちんとしないと、几帳面に実施、決り通り。
カドドマ…角には注意、曲がり角に気をつけて、丸くなれ。
カナリン…相当な、予想以上の、予定よりはるかに。
カナウメ…叶わないのでは、一目おいた、さすがに、降参。
カナドル…茹でた物をまとめる、苗をまとめて束に。
カナケ…金物の道具、金物の食器類、衣類についての金属。
カナグル…乱暴に雑草を取り集める、急いでむしり取る。
ガナ…範囲、おおよその量、金額に見合う量、量り売り。

ガナン…範囲内で、量り売りで、金額に見合うほどの量。
カナメウチュ…婚約の内輪決め、仮の話に予定を決める。
カナイメェ…叶わないだろう。叶わないようだから。
カナガ…草取り農具、小さな軽便草取り道具、重宝な農具。
カナクギユ…金の釘を、金釘を、金釘を持って来て。
カナグリマワス…乱暴に取り払う、乱暴に取って繕う。
カナバシャ…金属の箸を、鉄骨の橋は、金属性の火箸は。
カナビシャク…金物の柄杓、水くみ用の金物柄杓、水柄杓。
カナツキヤ…刃先が数本に別れた軽便漁獲道具、魚を突く。
カナダライ…ぶりきなどの鹽、少し小型なら洗面器。

カニミス…蟹の入った練り味噌、蟹などを入れた練り味噌。
ガニ…蟹、蟹の通称、谷や川海などで生きいい。
カニンシレンガ…そうかも知れないが、たぶんそうと思う。
カニユタタケ…鐘を叩いて、鐘で時を知らせ、鐘で火災を。
ガニアジュ…蟹の入った料理の味を、蟹の味を堪能して。
カヌータリ…叶いました、ほっとして、万事めでたしです。
カヌータカ…叶ったでしょう、叶ってよかったですね。
カヌガニヤ…肩に担ぎましょう、担いで早めの、運ぶ方法。
カヌゲ…担いで運ぶ、担ぐ運ぶ走るいっぺんに全身で。

か…カネドマ…鐘なども、金なんかは、金があれば、金が敵。
カネモツカイヨウ…取るより使わぬ工面、利口に使うのが。
カネンワラジ…年上嫁は運がよい、金の草鞋で捜しても。
カナンテ…直角になる場所、きちんとすれば狂いなし。
カネンカタキ…金が情けも敵も作る、上手な使い方を。
カネバシユ…金の箸で健康な生活、大事に使う程元気。
カノナクゴツ…小さな声で囁くような、時と使い分けで。
カノウテンネエ…叶って円満万歳、望みが叶う家庭も円満。
カノウタリ…叶っためでたい円満家族、終わりよければ。
カノタカ…叶ったのですね、努力すれば報われる。

ガバガバ…大げさに、躍動的な、激しい動きと発展的。
ガバット…急に起き上がる、咄嗟に立ち上がる、即応する。
カバンドマ…カバンなども、準備はできたのかカバンは。
カビンジョ…蠶ばかりの季節に、蠶には注意が必要。
カビデンヤクタツ…蠶にも多種多様あり、役立つ蠶の利用。
カビュコス…蠶こそ生活に欠かせん点も、蠶が案外役立つ。
カブンナ…かぶらないの、被りなさんな、被らないがよい。
カブレン…被れないから、被るのができない、被るの嫌い。
カブサウチ…二度目の雑穀叩きして落とす、少しでも収穫。
カフスベ…蚊をふすべて追い払う、蚊から体を護る。

カブッチョキヤ…被っていないさい、被っていたら似合うよ。
カブリャニアウ…被りなさいよく似合うから、使うも生活。
カブセチョケ…被せておきなさい、かぶせるとよく似合う。
ガブガブ…大げさに飲む、大胆に飲む、大きめが長持ち。
カブラニャ…被らないと、被ったほうがかわいいな。
カブリチーチ…大胆にかぶりついた、大きな口でがぶり。
カベギオ…壁のすぐ側を、壁すれすれに通る、壁の脇に。
カベクセ…蠶くさいけれど大丈夫、蠶がついているよう。
カベンスキモ…蠶が隙間を好んで、蠶はなかなか退治が。

か…カベンコマエダケ…壁塗の何に使う竹、壁を丈夫にする竹。
カベツチャナゴモツ……壁に塗った土は長持ちする、練土。
カベナリヤヒニツイ……壁なら防火にも、土壁は火に強い。
カベントラシヨワネエ…土壁倉は大丈夫、土壁は火に強い。
カベナシュ……軒下の空間、取り込み雨露しのげる。
カベドマ…壁などは、傷みかけた壁を皮肉って、壁補修を。
カベナシン……軒下の、軒下の有効利用、便利のよい軒下。
ガボガボ……おおげさに、多すぎる、盛りたくさんの。
カボチャリヤ……かばってやると、かばって大事にすれば。
ガボリット…ひとすくい、ひとにぎり、思い切り、大胆に。

カボチヨキヤ……かばっておけば、大事にしておけば。
カボウチヨカタ……かばってよかった、大事にならずに。
カボーチクレナァ…かはってください、助けてほしいので。
カボタナワケモ…かばったのにわ理由も、助けた代わりに。
カボテン……かばっても、助けてあげても、予想に反して。
カマワングタリヤ……構わないようで、世話しないので。
カマブタブシュ……にわか修理、とりあえず補修、緊急補修。
カマイメーキ……かまわないので、構わなくても、そのまま。
カマメシジ……釜のままの食事、釜から取らないままで。
カマーチャレ……構ってあげなさい、構ってあげたら。

カマウナワケモ……構うには訳も、世話するからにわ。
カマワレテン……つきまとわれても、世話されても。
カマウワキジ……世話してもらおう側で、構われ上手も。
カマクビユ……首を持ち上げて、危険を感じて首をあげて。
ガミガミイヨルウ……るさく言っている、然る声がうるさい。
カミデッポウ……紙玉のおもちゃ鉄砲、紙玉が飛ぶ鉄砲。
カミチーチ……噛みついた、噛みつかれて、かみついて吃驚。
カミナリヤ……雷は、怖いものの代名詞、雷鳴におびえて。
カミンタン……上の方にある田んぼ、方向を示す田んぼ。

か…カミガトゥ…髪の形を、理髪、おこしらえ、流行に合わせて。
カミンミナクチ…上の方にある田んぼの水口、水の取り入口。
カミンシャ…上のほう上手にある家の人たちは、その家族は。
カムゲテン…思い切って抱えあげて担ぐ、担いでも。
カムギアギイ…抱えて担ぎあげなさい、担ぎあげて。
カムチャオレン…構ってはいられない、それどころではない。
カムテンイイ…構ってもよいが、構ってあげよう、世話を。
カムチャレ…構ってあげたら、世話してあげたら。
カムワンシモ…構わない人も、世話をしない人も、知らぬ顔。
カムソバカル…唾みながら、唾んでいる側から、唾んでいる。

ガムシャリ…むやみやたらに、真剣に取り組んで、忙しく。
カメレントン…唾めないから、唾めないの、唾むのは至難。
カメ…唾めと言われても、唾めない事情があるから。無理よ。
カメチャカムド…唾めと言うなら、無理の押し売りは危険。
カメートン…唾むのはよいけれど、唾めますが、頑張る。
カメルリヤ…唾めれるならば、唾むのは無理だから。
カメタナイイガ…唾んだのはよかったが、無理は危険も。
カメツラエンギイイ…亀の顔に似ている縁起物、鶴亀万歳。
カメタナショワネエ…唾めたのなら大丈夫、でも無理は禁物。
カモートンイイキ…構わなくても構っても、ほどほどが大事。

カモテンノヤ…構ってもあとあとが、構うのもほどほどに。
カモワニヤ…構わなければ、迷惑だってある、知らぬふりも。
カモチョキャ…構っておけば、世話しておけば、世渡り上手。
カモタナヤンカ…構ったのはお前か、世話したのはそれも。
カモテンネエド…構ってもないから、世話されてもお礼は。
カモヤコス…構っていればこそ、構えばこちらも世話になる。
カモウソベ…構っていれば側で、世話する側で加勢する。
カモモンナラ…構うものなら、世話ができればそれも。
カモチタルンナ…構わなくてもよいから、世話にはもう。

あとがき

無くなってから気がつくものが 多くあるものです。新しいものに夢中になると 折角あったよいものが 失われ消えてしまう。

衣食住に恵まれ過ぎた現在社会は 不自由のなさの反省 失なわれたものがあまりにも多く 特に豊かさの心はもう 取り戻せない時代の流れに 溺れがある。

気づいて悔い反省すればよいが 耳を貸さずそれに向かって努力せず 立ち直らないと永久に 戻れない改造された世の中になって しまう。

こんな話を拝聴した事がありますが まさに得るものの多い反面 失われる物の多さに 『古きよき時代』を回顧し 貧しくとも楽しかったあの頃が 懐かしく甦ります。皆様のご愛読に支えられて 約20年あまり 先人の使い残した『生活用語であった方言』 今改めて見直されるのも 取り組んだ幸せと感謝しています。

関東の読者の方は『専門書ではないが肩の凝らない宝物』と発刊から 全てをカバーをかけて保存。年の流れに調査員の顔が 地方の経済文化までがまるで 浮き彫りされると言う人も。『オカン』も京都で使われている 『イッスンズリ』が大分方言。嬉しい風の頼りがいつも 入って刺激を受けています。

素人集団の調査会を優しく 見守ってくれる愛読者に甘えて これからも続く限り現在のペースで100冊限定。生きがいに五助さんと二人三脚で 掘り捜してユーモラスに 紙面を賑わせますので…。ご健勝の程ご祈念申し上げます。ご自愛の上お過しを お祈り申します。



伝言板

続 1 6

野津原方言集…続編№16号(通算26)のご案内です。『午年』にふさわしい表紙画を入れて『肥後街道を野津原から今市まで!』に続いて『宇曾山物語』を入れる予定です。

大和尊命が帰国の際に 宇曾群山を通り『なんとのだかな素晴らしい』と 絶賛したと言う故郷野津原。

そこで暮らした先人が 生活用語として使った野津原方言を 盛り込んだ 『民話、伝承』をはじめ 調査員が余暇に収拾した 『ふるさとん味』『方言子供ん世界』 さらに『女性ん底力』『故郷の玉手箱』。

ちょつぱり楽しい 五助街道物語りには 世相が反映され泣き笑い人生を コミカルに綴る。『巡り会い人生』には 人間 一人では生きられないを 地で行く人たちの体験や実践も。こぼれ話…何が飛び出すか お楽しみなジャンル。五助さんもタフで人気者です よろしくとのこと。

方言単語は連続で今回は 『か』行の途中から すでに数10000語…越えました。この20年間に頂いた塗料や聞き取りした資料、調査でわかった『あんな話こんな話題』を アレンジ構成して ジャンルごとに細分。ひょいとお化粧して登場します。

限られた会員 余暇の利用 手造りなどで お世辞にも素晴らしいとは言えませんが 手づくりだから価値も…。そう信じて取り組み 頑張っています。いつもご愛読感謝申し上げます ご案内といたします。ご自愛の程を再会まで。お会いの口楽しみにしています。

調査会員一同

『ちよいとオゴメンな』

五助さんが浮かん顔じ 馬ん首が長うなるごつ 引っぱっち
帰っち来た。『ほらのう 何かアツタンジャロウ 五助さん』
『ムゲネコサレ』 そげー思いよったら 娘たちゃソゲナこた
関係ねえごつ はしやぎよる。『五助さんで』 誰かが目ざと
見つくと 『又唄を聞きてえなぁ』

囃子たつるもんじゃき ダマシ立ち止まった五助さん そんな
娘たちん腰にサゲチョル 香り袋に目がいった。『そうじゃ
やっぱソウジャツタンジャ』 たまがった娘たちが 『どした
んな』『いんにゃ こん前書いたんが 間違うちの 『思いで
一た そりゃそん 錦ん袋。』

No 14号ん『77Pと、80P』ん 『綿屋』が『錦屋』に
なっちょるき オゴメンナ。アンマリ 錦ん袋が美しいもんじ
き それが頭じ渦巻 綿が錦になったごたる。『五助さんでん
ソゲナコツーモ あるんじゃなぁ』『アルグレカ ねんじゅう
ど こん前ども『口笛フイチミテ』ち 言うき 吹いたら『ま
ぁ五助さんな『くちびる拭いて』じゃにもう。』

『ぼちぼち ポケタンカノウ』『そげんこたー ねえがえ』
皆んなもチツタ 同情もしたんじゃが 無理もねえごたる。
友達が誘いに来たき 『いま道場に行ったんで』『何えドジョ
取りに行ったんな』と 来たきなえ。『時々トポケタふりも
するけんど元々耳は タツシャジャツタニ』なぁ。

方言もこげなふうに ちょこっと聞きソコナウト 意味がデ
ェブン違うきなぁ。『せいて』⇒これだん…急いで。閉めて。
せきとめて。なんかに早変わりするが 意味は広がっち行く。
それが方言の難しい所じ いいところかん知れん。

もう60年はず前ん話いなるが まゝ田植えがチョボチョボ
植ん頃ん 話しじゃつた。五助さんな馬ん荷運びが 忙しいき
小昼んカンカラ餅う 鞍にヒツケチ大分まじ 行くこちなつ
た『早う帰りゃ 手を出すき』『おおきに気をつけち 行きな
あえ』

『宙に飛んだ苗が程いいトコリ落ちた 野津原じゃ田植えが
始まりました』 話芸達者なアナウンサーが ラジオかる放送
しよるんが ハモンドオルガンの バック音に乗せち 流れち
くる。アンテナを張った農家 ここにゃラジオがあるち すぐ
わかる時代じゃき 好奇心旺盛ん青年な そば耳立てち聞きよ
る。濁った田んぼん中 それでん植えつけが済むと 気の早い
蛙が我が物顔に 苗の間を泳ぎ回りよる。

田植えの済んだ午後には 里ん田植えに加勢に行くんか 若
い夫婦が雨道具を束ぬると 母親が準備したんか みやげん包
みを抱えた若い嫁さんの 横顔もなんか嬉しそうに 眺めらる
るきなんか 心まじが和む農村の風物詩。こげな放送を聞くど
いかにも のどかに じゃが食料はまだ不足気味。米一俵運動
は広まっちゃよる。

一日じゅう水ん中ん作業じ ダッタんじゃろう いっぱいん
ヤツガイも 回りが早うなっち いっときしよると 横にゴロ
リンコ。『酔いがはえーなあ』 かたづけしながら バアサン
な『まゝまあフント』 むげねーんか アツシ半纏 じわっと
かけちゃつた。

五助さんが戻っち来た。『遅うなっちシモウタ』『ひずかっ
たなあ まゝあがらん』『もう済んだんじゃな』『いいあん
べーにな 若いしどま 在所に』 忙しい間はアングェ コンゲ
『若えしも忙しいなあ』

